長谷川仏教文化研究所年報　第39号　抜刷
2015年 3 月25日発行

Gopāla 著 Kṛtyakāmadhenu の貝葉写本（上）

古 宇 田　亮 修

〈個人研究〉

Gopāla 著 Kṛtyakāmadhenu の貝葉写本（上）

古 宇 田　亮 修

はじめに

Dharmaśāstra『ダルマに関する教典』の歴史は，Baudhāyana-dharmasūtra, Āpastamba-dharmasūtra, Gautama-dharmasūtra, Vasiṣṭha-dharmasūtra といった sūtra 体で著された Dharmasūtra から始まるが，その後に著された韻文の Smṛti，すなわち Manu-smṛti, Yājñavalkya-smṛti を代表とする文献群は，Mahābhārata，Rāmāyaṇa や多数の Purāṇa 文献とともにヒンドゥー教を構成する重要聖典に位置づけられるものである。

この分野の基盤的研究としては，Pandurang Vaman Kane による *History of Dharmaśāstra*, 5 vols in 8 parts, 1930-1962.（以下 Kane HDh.と省略）が，出版後半世紀以上経過した現在でも，最も詳細かつ包括的なものである。同書で詳しく述べられる Dharmaśāstra はおよそ 100 点になるが，中には散逸して他書における引用としてしか現存しないものも含まれている。

筆者は，2010 年に日本の古書店より，全 50 葉の貝葉に著されたサンスクリット写本を入手した。その奥書から判断すると，当写本は［Kane HD.: I, 2, 616-622］no.72. Kāmadhenu に相当する文献（当写本の示唆する題名は Kṛtyakāmadhenu）の一部（Śrāddha（祖霊祭）に関する章）であると考えられるが，これも Kane が HD.を執筆した時点では，他書における引用を除き写本は未発見とされている[1]

[1] その後，当該写本が他所より発見されたか否かについては，インドや他国で発刊されている多数の研究誌を精査した訳ではないので不詳であるが，万一，重複したとしても別写本であれば公表する価値はあると判断した．[NCC.: III, 350]を見る限り，1967 年時点では

ので，Dharmaśāstra の歴史を解明するための一次資料として，ここに前半部分のスキャニング画像を公開する次第である。

１．写本の外形

サイズは，縦 5.5cm，横 61cm，全体の厚さ 1.5cm である。素材は，貝葉である。葉数は，全 50 葉，そのうち全く記載のない貝葉が 2 葉あるので，実質は，48 葉である。48 葉全てに葉番号が記載されており，2 から始まり，49 まで存在するので，冒頭の 1 葉が欠損していることになる。

経年劣化により，貝葉の端の一部に欠けが見られる（ff. 2-5）。また，貝葉の部分的収縮により歪みも見られる（f. 25）。

本稿では，紙面の都合上，全 48 葉のうちの前半（ff. 2-25）の写真を掲載することにする。なお，１葉を左右の綴じ穴箇所で 3 つに分けて掲載したので，コピーの上，糊づけする手間を厭わなければ，元の形態を復元することが可能である。縮尺は原寸の約 62%であるから，161%に拡大すれば，ほぼ元の大きさになる。

２．奥書について

まず最初に，第 49 葉 3 行目の途中から書かれている奥書部分の Romanized Text ならびに試訳を以下に記しておく。

Romanized Text

(49r.3) ~ iti bhaṭṭaśrībhaṃgādityātmajaśrīgopālavi[(4)]racitāyāṃ kṛtya-kāmadhenavādye[2] dharmapāde tṛtīyaḥ śrāddhāṃśaḥ samāptaḥ // // oṃ vyāpto yaṃ yena śailau○cchaladamalajalaiḥ sāgarās tais taḍāgaiḥ rathāgārair dvijātāṃ diśi-diśi vasudhār vāmagaurīr dharitrīpūrṇaṃ ca ○ śrotriyāṇāṃ bhavanam aviratoddāmavarṣair vasūnāṃ gopālaḥ sarvadānāśrayam akṛtakṛtīn saptam aṃśonsam eta[(5)]n* // // // tatra dānavidhiḥ / dānasvarūpaṃ

写本の存在は報告されていない.

[2] *Read* ˚dhenvādye.

pātralakṣaṇaṃ // // saṃvat 1209 āṣāḍha vadi 12 śanau śrī○madvārāṇasyāṃ śrīmadgoviṃdacaṃdradevakalyāṇavijayarājye // // // oṃ namo bhagavate vāsudevā○ya // // yādṛśaṃ pustakaṃ dṛṣṭvā tādṛśaṃ likhitaṃ mayā / yadi śuddham aśuddhaṃ vā mama doṣo na dīyate // // // oṃ //

（試訳）

「以上で，バッタ・シュリー・バンガ・アーディティヤの子孫である聖ゴーパーラによって作られたクリティヤ・カーマデーヌ『義務の如意牛』の冒頭のダルマ巻（パーダ）における第三の祖霊祭部分が完結した。オーン。（以下 1 文解読不能につき，翻訳省略）そのうち，布施の儀軌，［即ち］布施の自性，祭具の特相が［述べられた］。

1209 年，アーシャーダ月，黒分，12 日目，土曜。聖なるヴァーラーナスィーの聖なるゴーヴィンダ・チャンドラ王（デーヴァ）の素晴らしい王国にて。福あるヴァースデーヴァに，オーン。私は，［原］本を見たままに書写した。正誤については私の過失ではない。オーン。」

この奥書によれば，書写の場所は，Vārāṇasī である。また，1209 年という年代は Vikrama samvat と考えられるので，上記の日付は，矢野道雄・伏見誠両氏の手に成るインド暦計算プログラム Pancanga[3] によれば，紀元後 1152 年 7 月 1 日，火曜日に相当するようである。しかしながら，一般に Sanskrit 写本の年代確定に際して，奥書のみを典拠とすることは危険を伴う。奥書ごと筆記者によって転写される可能性があるからである。理想的には，放射性炭素（炭素 14）の測定により，ある程度の範囲にまで貝葉の製作年代を限定し得るので，当写本のように写本現物に触れられる場合は，外部研究機関に委託する費用の問題さえクリアできるならば，それを実施することが望ましい。

[3] Pancanga: version 3.14（http://www.cc.kyoto-su.ac.jp/~yanom/pancanga/）.

３．Govindacandra 王とその時代の書体について

［小谷汪之 2007: 31-32］の記述によれば，「プラティーハーラ朝が衰滅していく十一世紀前半から後半にかけて，ヴァーラーナシーからドアーブ地方（ガンジス・ジャムナー両河間の地方）は，ガズナ朝やパラマーラ朝の侵攻を受けたり，また一部はカラチュリ朝の統治下に入っていたりして混乱していたが，おそらく 1080 年代前半に，ガーハダヴァーラ族のチャンドラデーヴァがカナウジを攻略して都とし，この地方一帯の政治的統合をはたした」とされるが，この Gāhaḍavāla 朝で，Candradeva 王の後 Madanapāla 王を経て，王権を継承したのが，Govindacandra 王である。Govindacandra は，Candradeva の孫に当たる。Govindacandra が王位に就いた時期は，Madanapāla 王の最後の碑文が残された 1109 年から Govindacandra 王の最初の碑文が現れる 1114 年の間と考えられる［Niyogi 1959: 65］。そして彼が残した最後の碑文は 1154 年であるから，少なくとも 40 年にわたり王位にあったことが解る［Niyogi 1959: 90］。

Govindacandra 王に関する銅板銘文は，［Hultzsch EI.: IV, 99-120］に掲載されている[4]が，同書 pp. 100-101 の間に収録されている銅板の拓本（Vikrama samvat 1182）は，この時代の書体を知る上で有益である。当写本との比較のため，拓本の色を反転した画像を次頁に掲載しておいた。両者の比較において，筆者が特に注目した類似点は以下の３点である[5]。

① この時代の文字の特徴を示す bha, sa, ja の字形

② pa と ya の微妙な相違，

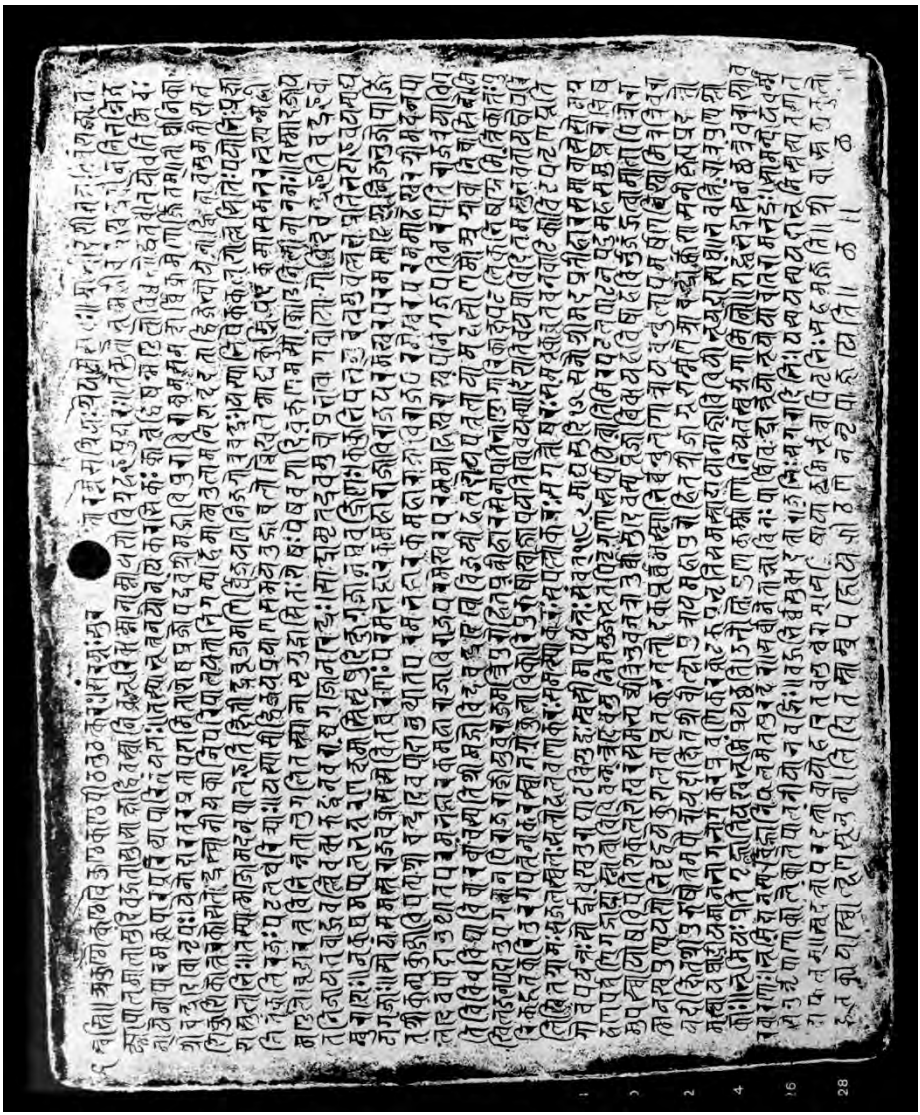
③ 末尾に記される cha の文字に似た吉祥紋章（当写本 : 銅版 ），

このように書体を比較するかぎりでは，当写本の奥付は転写ではなく，実際に「紀元後 1152 年 7 月 1 日」に書かれた可能性も十分にあり得るものと考えられる。

---

[4] 近年，下記の両研究が出版されたようであるが現時点では未見である．T.P. Verma & A.K. Singh: *Inscriptions of The Gāhaḍavālas and Their Times,* 2 vols, 2010. A. K. Dubey: *Culture Under the Gāhaḍavālas: Epigraphical Studies*, 2012.

[5] Nāgarī 書体の変遷については，［Singh 1991］が同時代の多数の書体を一覧表にしているので有益である．



Kamauli Plate of Govindacandra, Vikrama samvat 1182. (black-and-white inverted image)
from E. Hultzsch (ed.): *Epigraphia Indica and Record of the Archeological Survey of India*, vol. IV, 1896-97, Calcutta, pp. 100-101.

当写本の書体は，北インドで一般的な Nāgarī（／Devanāgarī）と呼ばれる書体である。但し，第 49 葉の裏面に，目次のような書込みがあり，その部分の書体は，Nepal で使われていた書体の特徴を示している。それゆえ当該箇所は，当写本が Nepal に持ち込まれた後に記載された可能性が高いものと思われる。

また，欄外註のうち，本文の筆記者によるもの（5v. right）と推測されるものの他に，Nepal 系の書体での欄外註（例：8r. left, middle, 16r. right, 17r. middle, 19v. left, middle, right, 20r. middle, right, 20v. left）があり，これらは Nepal において記載されたと考えるのが妥当である。

４．Kṛtyakāmadhenu とその著者 Gopāla に関する従来の研究

[Kane HDh.: I, 616-622] では，当写本が示唆する書名 Kṛtyakāmadhenu でなく，Kāmadhenu という名で言及されている。それによれば，当該写本は見つかっていないが，他の Dharmaśāstra での言及・引用から，その存在が知られるという。具体的には，Lakṣmīdhara 著 Kṛtyakalpataru (Brahmacārikāṇḍa)，Śrīdharācārya 著 Smṛtyarthasāra，Aniruddhabhaṭṭa 著 Hāralatā，Caṇḍeśvara 著 Vivādaratnākara，同 Rājanītiratnākara といった書物において言及されているという。Kāmadhenu の作者の名前については，それらの Dharmaśāstra に明確に述べられているわけではないが，Kane は種々の状況証拠から，Aufrecht が掲げる Śambhu 説を批判して，Gopāla であると主張している。当写本の奥書により，Kane の主張が裏づけられたことになろう。

なお，Gopāla の年代について，［Kane HDh.: I, 622］は，上記の他書との関係から紀元後 1000-1100 年の間に置いている。

５．Lakṣmīdhara 著 Kṛtyakalpataru に言及される Kāmadhenu

Lakṣmīdhara 著 Kṛtyakalpataru の冒頭の章である Brahmacārikāṇḍa の序文部分（第 10-12 偈）において，Gopāla と Kāmadhenu が登場する。まず，その箇所の Romanized Text と試訳を以下に掲げる。

Kṛtyakalpataru: Brahmacārikāṇḍa (p. 3)

paurāṇir eva vāṇīḥ kvacid akṛtakṛtau kvāpi bhūyaḥ smṛtīnāṃ
　　gopālas tadvayasyaḥ svakṛtiviracanaṃ vākyarūpeṇa cakre /
śrautasmārtādisārair vibudhajanamanohāri kāriṣyate 'yaṃ
　　mīmāṃsottaṃsitārthair apṛthur atha kathātītarandhraḥ prabandhaḥ // 10 //
yasyotthitau sthitimatī na mahārṇave śrīḥ
　　nidrāṃ dadhāti yad adhaḥ kila kāmadhenuḥ /
tasyātaniṣyati ratiṃ vibudhadvijānāṃ
　　ānandanaḥ kim u na kalpataroḥ prarohaḥ // 11 //
kā cintaiva mahārṇavānusaraṇe kā kāmadhenuspṛhā
　　kṣudrāḥ kasya parisphuranti hṛdaye te ratnamālādayaḥ /
śrīlakṣmīdharabuddhivaibhavasudhāsekaprabhāvād ayaṃ
　　yenāntaiva jagattrayopakṛtaye kalpadrumaḥ kalpate // 12 //

（試訳）

「10. 彼（＝Lakṣmīdhara）と年代を同じくするゴーパーラは，自作の編著を，ある部分ではプラーナの文句を入れ，またある部分では伝承聖典（スムリティ）の文句を入れ，かつて作られたことのない作品として，文章の形に整えた。

語り口によって欠陥を克服したこの簡潔なる[6]書物（＝Kṛtyakalpataru）は，学習聖典・伝承聖典等の精髄および祭義学（ミーマーンサー）を宝冠とする意味によって，賢者たちの心を魅了するものを作り出すであろう。

11. 彼（＝Lakṣmīdhara）が起床したとき，『大海（マハールナヴァ）』において永遠なるシュリーは存在しない。『如意牛（カーマデーヌ）』は彼の下で眠りについている。

彼の『如意樹（カルパタル）』の喜ばしい成長が，賢いバラモンたちの歓喜を増大させないというようなことがどうしてあるだろうか？

12. 『大海（マハールナヴァ）』を追い求めるいかなる心があろうか？　『如意牛（カーマデーヌ）』へのいかなる欲望があろうか？　『連宝珠（ラトナ・マーラー）』等の劣ったものが，いかなる人

[6] 「簡潔なる（apṛthu-）」と述べているが，実際には大部の書物である．種々の Smṛti からの引用により長くなっているのであって，自説を述べている箇所は簡潔であるということを意味しているのか．やや疑問が残る．

の心において躍動するであろうか？

聖なるラクシュミーダラの知性の偉大さという甘露（スダー）の逆（ほとばし）りの出現により，この『如意樹（カルパタル）』は，三界の生き物の手助けとなるのである。」

この偈文に現れる『大海（Mahārṇava-）』や『連宝珠（Ratnamālā-）』といった書物も，『如意牛（Kāmadhenu-）』と同様に Gopāla の作品であるか否か，確言することはできないが，当時，それらは一般に流布していた書物であったような書きぶりである。

［Niyogi 1959: 84］によれば，この著者 Lakṣmīdhara はたんに学者であるだけでなく，「千人の敵を殺した」武将であり，大臣としても活躍したことにより，Govindacandra 王により，Kṛtyakalpataru の執筆を依頼されたと自ら述べているという。Lakṣmīdhara 自身の語るところによると，父は Bhaṭṭa Hṛdayadhara であり，自身のことを Govindacandra 王に仕える[Mahā-]Sāṃdhivigrahika「（偉大な）外務大臣」[7]であったと称している。［Kane HDh.: I, 691］は，Lakṣmīdhara が，Govindacandra 王の下で武将となったのが 1115 年頃であったとすれば，10 年か 15 年を経た 1125 年もしくは 1130 年頃に，Kṛtyakalpataru の執筆・編纂に着手したと推測する。

［Kane HDh.: I, 691］も指摘しているように，Lakṣmīdhara は，自己中心的かつ傲慢な人物であったことが上記の序文からも解る。Lakṣmīdhara は，Kāmadhenu の書名を挙げて引用することは一度もない。しかし，Kane が推測するように，Kāmadhenu の名を本文で使わないのは，実はその書籍からの無断借用を行なっているからなのではないか，という疑問は残る。

今後は，当写本と Kṛtyakalpataru: Śrāddhakāṇḍa を比較することにより，一つの章とはいえ，その疑問を解決する手がかりを得ることができよう。本書の構成および他書（Kṛtyakalpataru 等）との比較は，全葉の公開が済んだ次稿以降の課題としたい。

---

[7] 字義は「同盟（saṃdhi-）と離反（vigraha-）に携わる者」であり，他国と同盟するか，離反して戦うかを決定する大臣を指す.

また，そもそも Kṛtyakalpataru という書名自体，Kṛtyakāmadhenu から着想を得て（もしくはその名声に対抗して）命名したと考えることは自然である。当写本が奥付において，Kāmadhenu ではなく Kṛtyakāmadhenu と称していることは，そのことの傍証となろう。

６．Kṛtyakāmadhenu（Śrāddha 章）における引用

Kṛtyakāmadhenu は，この時代（11 世紀）の Dharmaśāstra の特徴として，諸々の文献の引用から成っている。筆者の雑駁な調査でも，二大叙事詩（Mahābhārata, Rāmāyaṇa）はもとより，6 種の Dharmasūtra, 23 種の Smṛti 類，6 種の Gṛhyasūtra, 13 種の Purāṇa の引用があることが解った。精密な調査により，さらなる引用の発見が期待されよう。また，現存する Text との比較対照も今後の課題である。これらの引用の中には，完本が現存しないものも含まれている。その意味で，当写本がそれらの復元にも役立つ可能性を秘めているといえる。

Epic

Mahābhārata	6v.3; 9r.3; 10v.1; 15v.2; 16r.2; 18v.1; 20r.1; 36v.1; 37v.4
Rāmāyaṇa	42r.3

Dharmasūtra

Āpastamba-dharmasūtra	4v.4; 6v.1; 9v.1; 13r.5; 17v.4; 18r.1; 27r3; 30r.4; 44v.5
Gautama-dharmasūtra	4v.3; 11v.3; 14r.3; 19v.1; 45r.3
Baudhāyana-dharmasūtra	22r1; 26v1; 30v.2; 40r.3
Vasiṣṭha-dharmasūtra	4v.3; 5v.2; 11v.2; 12v.2; 13r.5; 15v.2; 19v.2; 30r.3
Hārīta-dharmasūtra	4v.3; 6r.5; 9v.1; 10r.4; 10r.5; 10v.3; 13r.5; 14r.2; 15r.3; 18r.1; 18r.3; 18v.3; 19r.1; 20r.2; 20v.1; 21r.1; 28v.4; 29r.2; 30v.2; 32r.5; 38v.5; 39v.1; 42r.5; 43v.1; 44r.5
Laghu-hārīta	8v.3; 38v.1; 42v.1; 43r.1; 44v.2; 45r.1; 45v.2; 46r.5

Smṛti, etc.

Uśanas	12v.3; 13v.2; 17v.4; 21r.5; 38r.5; 42v.1; 44r.2
Ṛṣyaśṛṅga	8r.3; 21r.4; 45r.1
Kātyāyana	9v.1; 14r.3; 17r.2 (twice); 18r.2; 20v.5; 22r.3; 22v.4; 26r.1; 30v.2; 31v1; 39r.3; 40r.1; 40v.1; 46r.5; 48r.1
Kārṣṇājini	20v.1; 35r.3
Chāgaleya	30v.1
Jābāla	43r.2
Devala	6r.1; 12v.1; 14v.1; 16r.4; 17r.1; 17r.2; 18r.3; 19r.1; 19v.5; 20r.2; 20v.2; 21r.3; 22v.4; 28v.1; 29v.3; 29v.5; 33r.3; 35r.4; 42r.4
Nārada	16v.5; 39v.2
Paiṭhīnasi	9r.5; 28v.3; 40r.3; 45v.3
Pracetas	39v.5; 44v.5
Bṛhaspati	2r.2; 8r.4; 11r.5; 17r.1; 19v.2; 20r.3; 32r.3; 36v.4; 41r.1; 45r.2
Manu	4r.4; 4v.4; 7v.5; 8r.4; 8v.4; 8v.5; 9r.2; 9v.2; 11r.2; 11v.1; 11v.5; 13v3; 15r.3; 16r.5; 17v3; 18r.2; 19v.3; 20r.3; 20r.5; 20v.5; 21r.1; 28r.1; 28r.3; 28v.1; 29v.2; 30r.4; 30r.5; 30v.2; 33r.1; 33v.5; 34r.1; 36v.5; 38v.2; 39v.5; 41v.3
Marīci	6r.5; 39v.3; 45r.2
Yama	4r.2; 4r.4; 9r.3; 9v.2; 11r.5; 13v.1; 14r.5; 14v.5; 17v.2; 18r.1; 18r.3; 18r.5; 18v.3; 19r.1; 19r.4; 20r.1; 27r.1; 28r.2; 28v.4; 29v.4; 30r.1; 30v.1; 32r.1; 35v.4; 36v.3; 40r.3; 40r.4 (twice)
Yājñavalkya	4r.5; 7r.3; 11v.2; 11v.3; 14r.5; 19r.5; 22r.1; 26r.1; 29r.2; 29v.1; 35v.3; 35v.4; 42r.5
Laghu-yama	29v.1
Logākṣi	16r.5
Viṣṇu	4r.3; 4v.1; 5v.1; 7r.1; 9r.4; 10v.4; 12v.3; 15r.3; 20v.3; 21r.5; 23r.2; 24r.4; 28v.1; 28v.3; 29r.1; 29r.3; 38v.3; 40v.3; 42v.4; 45v.4
Vṛddha-śātātapa	28v4; 29v.5; 44r.1z
Vyāghra	40r.5

Śaṅkha	9v.2; 10r.5; 12v.1; 15r.2; 24r.5; 35r.5; 40r.5; 44v.4; 45r.3; 45v.3
Śaṅkha-Likhita	12v.2; 14r.3; 15r.3; 17v.2; 22r.5; 29v3; 39v.5
Śātātapa	4v.2; 6r.3; 8r.4; 11v.1; 20v.4; 30r.3; 35v.1; 37v.5; 40v.1; 42v.3; 44r.4; 44r.5

Nigama　8v.5; 9r.2; 39r.2

Gṛhyasūtra

Āśvalāyana-gṛhyasūtra	19v.1; 22v.1
Āśvalāyana-gṛhyapariśiṣṭa	40v.3
Gobhila-gṛhyasūtra	18v.4; 40v.3
Pāraskara-gṛhyasūtra	42r.5
Vaijavāpa-gṛhyasūtra	23r.1; 43r.3
Śāṅkhāyana-gṛhyasūtra	39r.1

Pariśiṣṭa

Chāndoga-pariśiṣṭa	22v.4

Purāṇa

Ādi-purāṇa	35r.3
Āditya-purāṇa	10r.1
Devī-purāṇa	7v.4
Padma-purāṇa	5v.1
Brahma-purāṇa	4r.4; 4v.5; 5r.3; 5r.5; 5v.4; 6r.4; 11r.1; 18v.2; 18v.4; 19v.3; 20r.2; 21v.4; 23v.1; 24v.1; 24v.2; 25v.5; 27r.4; 29r.1; 29r.4; 30r.4; 34r.5; 35r.1; 35r.5; 36r.2; 36v.2; 40r.2; 47v.3; 48r.4
Brahmāṇḍa-purāṇa	4v.5
Bhaviṣya-purāṇa	5r.2
Matsya-purāṇa	2v.1; 5v.3; 8r.1; 8v.4; 10v.5; 16r.3; 19r.3; 22r.2; 27v5; 28r1; 30v.4; 35r.3; 35v.2; 35v.5; 36r.4; 38r.4; 40r.5;40v.2; 46r1

Mārkaṇḍeya-purāṇa	10v.4; 17v.5; 35r.2; 45v.1; 46r.5
Varāha-purāṇa	41r.2
Vāyu-purāṇa	4r.3; 5r.3; 5v.3; 6r.5; 6v.3; 7r.5; 9v.3; 10r.1; 10v.3; 12v.3; 12v.5; 12v.2; 15v4; 20v.3; 21v.5; 24v.2; 27v.1; 29r.1; 33v.5; 37r.4
Viṣṇu-purāṇa	5v.4; 17v.5; 18v.3; 19v.4; 30v.5; 38r.1; 45r.4; 46r.1; 47v.2
Skanda-purāṇa	17r.5

〈略号ならびに主要参考文献〉

［小谷汪之 2007］小谷汪之編『南アジア史　２：中世・近世』（世界歴史大系）山川出版社.

［渡瀬信之 2013］渡瀬信之訳注『マヌ法典』（東洋文庫）平凡社.

[Hultzsch EI.] E. Hultzsch: *Epigraphia Indica and Record of the Archeological Survey of India*, Calcutta, vol. III-IX, 1894-1908.

[Kane HDh.] P. V. Kane: *History of Dharmaśāstra (Ancient and Medieval Religious and Civil Law in India)*, 5 vols in 8 parts, Poona, 1930-1962. (2nd ed. 1968)

[Kṛtyakalpataru] *Kṛtyakalpataru of Bhaṭṭa Lakṣmīdhara, vol. I. Brahmacārikāṇḍa*, edited by K. V. Rangaswami Aiyangar, Baroda, 1948.

[NCC.] *New Catalogus Catalogorum*, ed. by V. Raghavan *et al*., Madras, 36 vols, 1968-2014.

[Niyogi 1959] R. Niyogi: *The History of the Gāhaḍavāla Dynasty*, Calcutta.

[Olivelle 2000] P. Olivelle: *Dharmasūtras. The Law Codes of Āpastamba, Gautama, Baudhāyana and Vasiṣṭha*, Delhi.

[Olivelle 2005] P. Olivelle: *Manu's Code of Law. A Critical Edition and Translation of the Mānava-Dharmaśāstra*, Oxford.

[Singh 1991] A. K. Singh: *Development of Nāgarī Script*, Delhi.

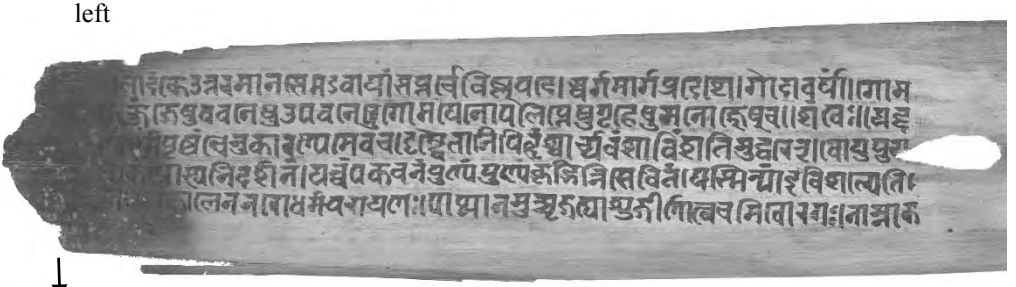
[Thakar 2003] A. D. Thakar: *Reconstruction of Śaṅkha Likhita Smṛti*, Gujarat.

（当研究所専任研究員）

FACSIMILES
(folio 2-25)

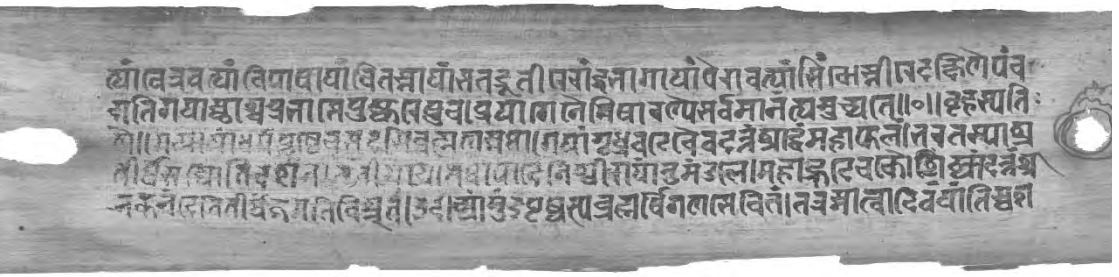
Folio 2 recto

left

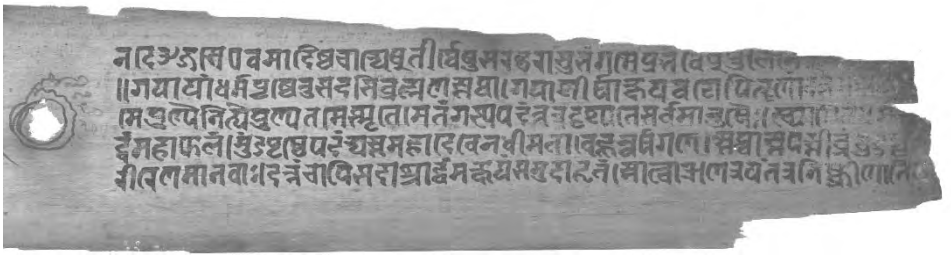


Contrast-enhanced image

middle

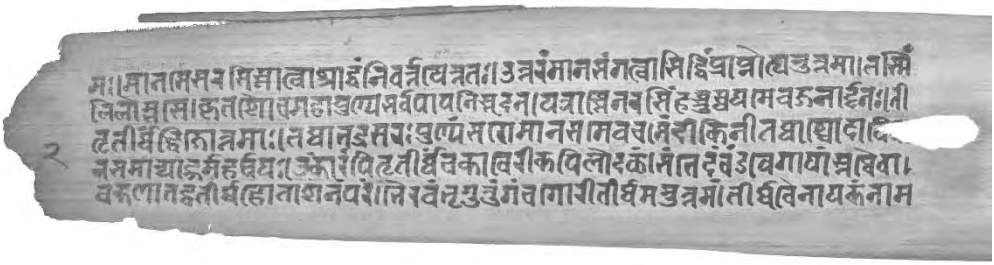


right

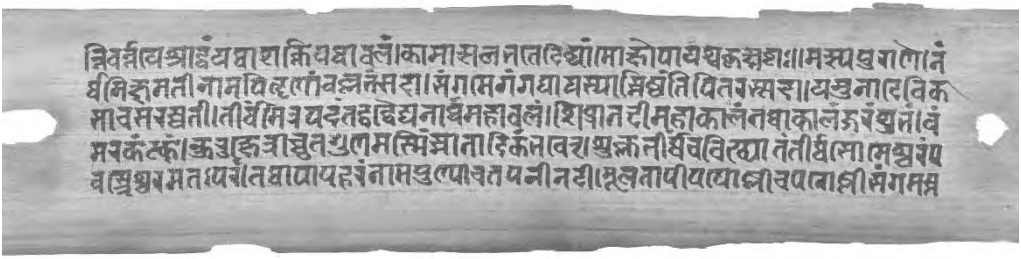


Folio 2 verso

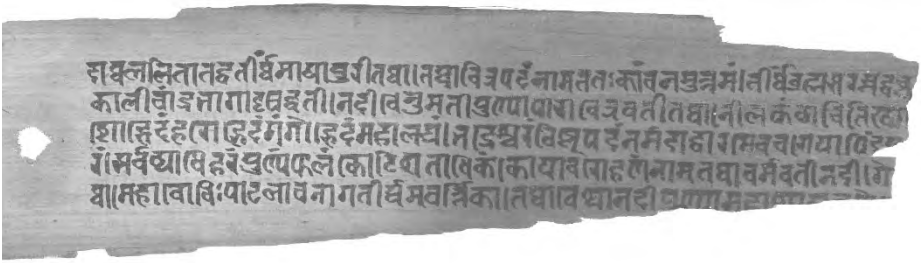
left



middle

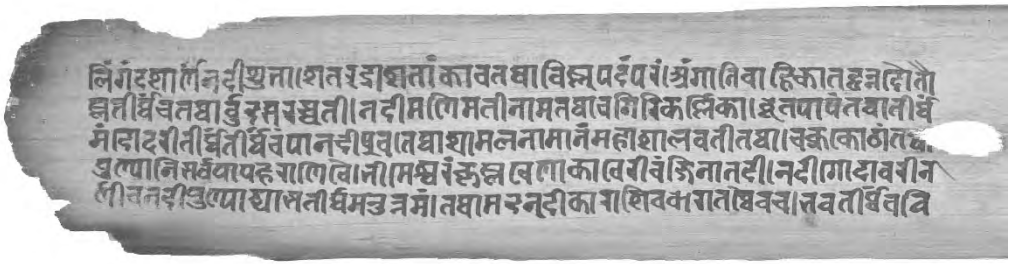


right

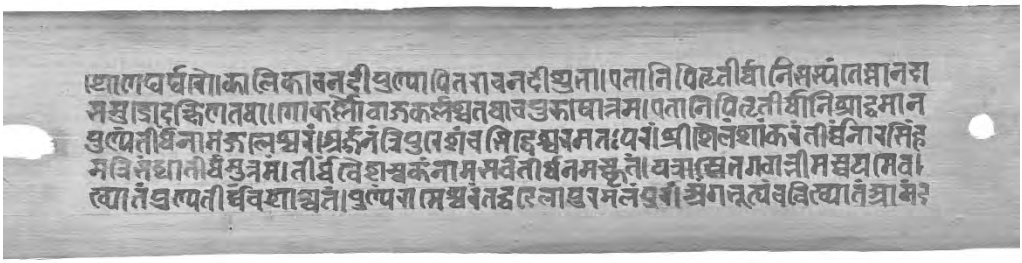


Folio 3 recto

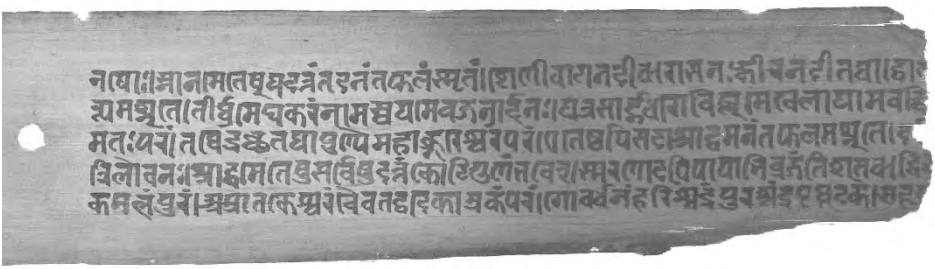
left



middle

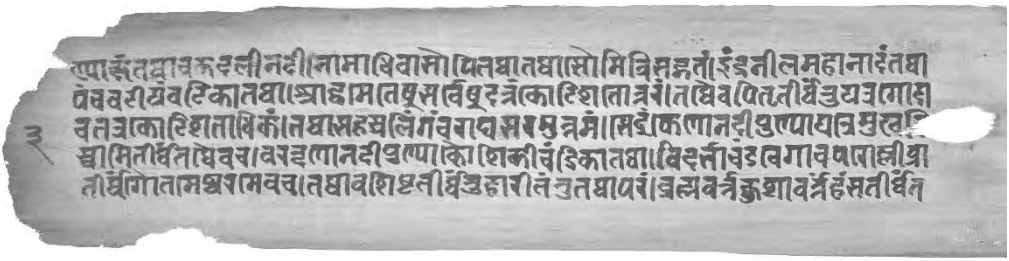


right

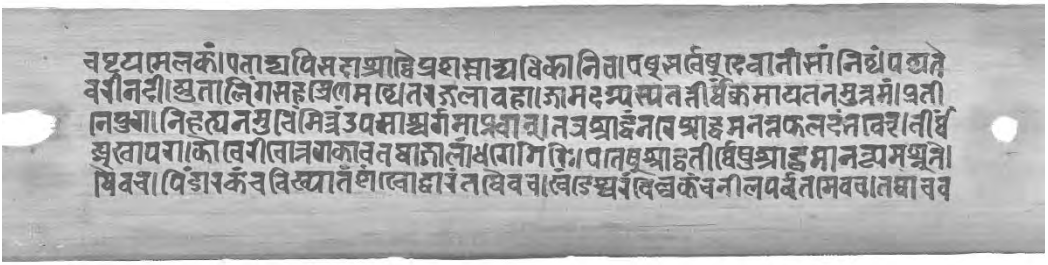


Folio 3 verso

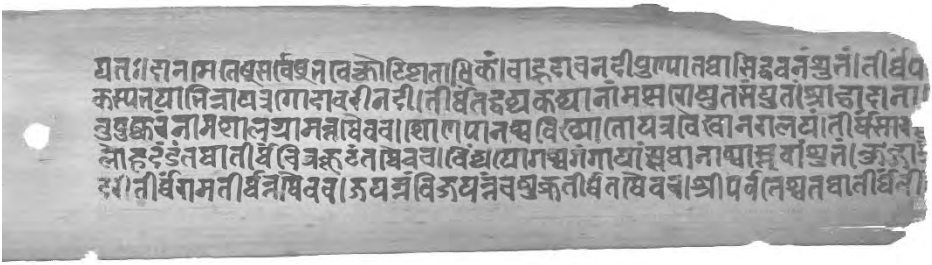
left



middle

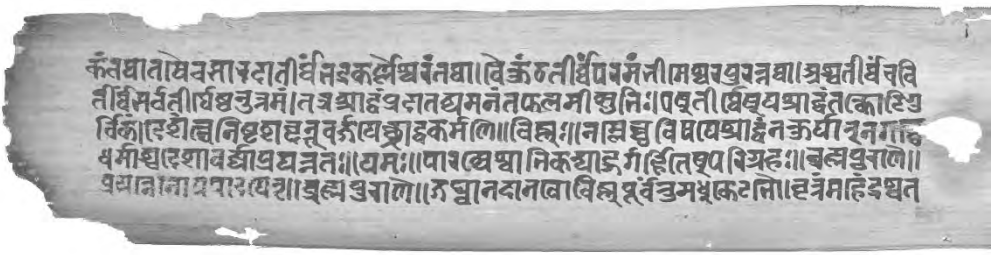


right

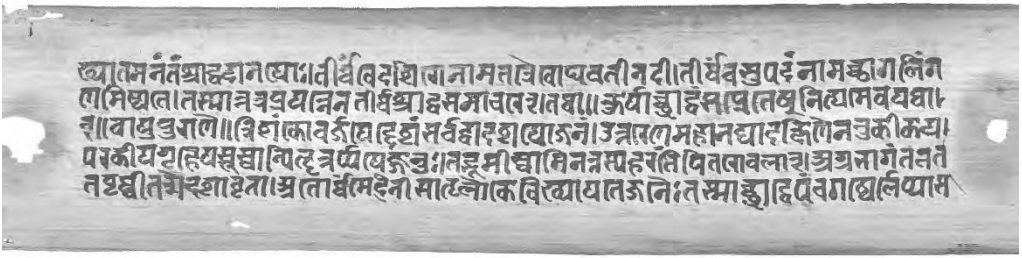


Folio 4 recto

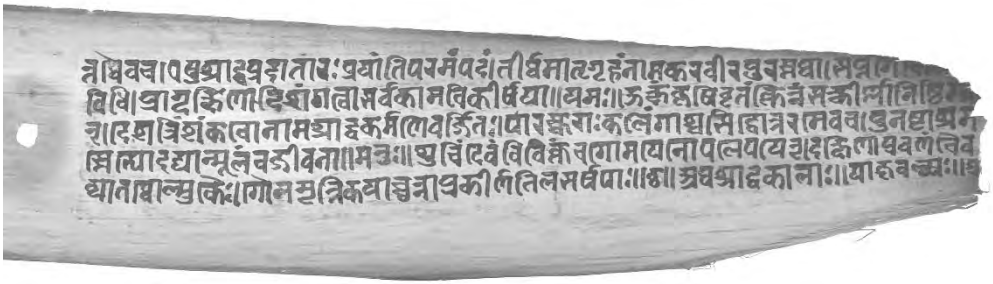
left



middle

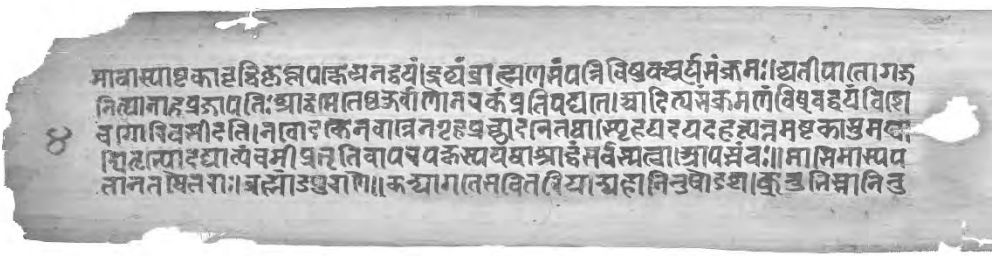


right

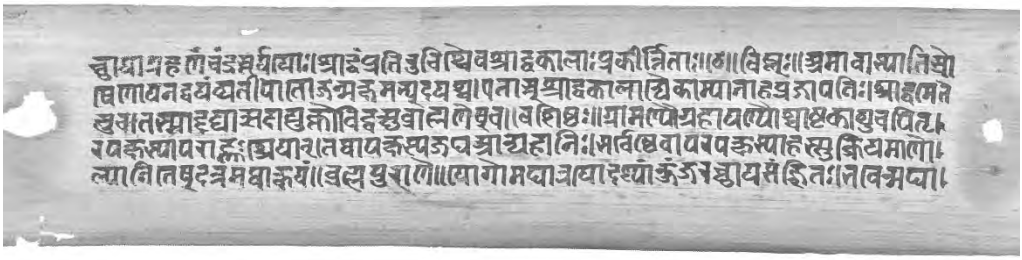


Folio 4 verso

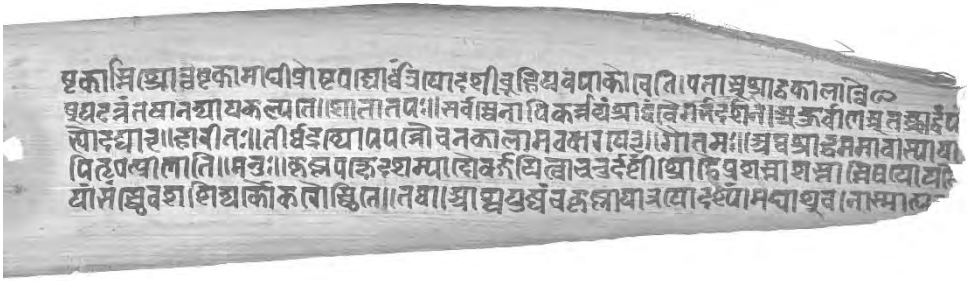
left



middle

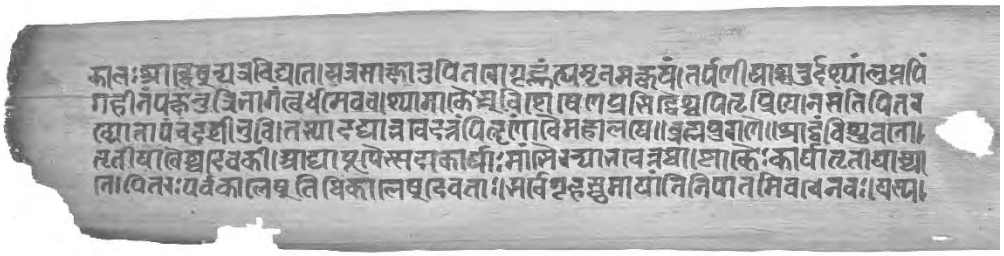


right

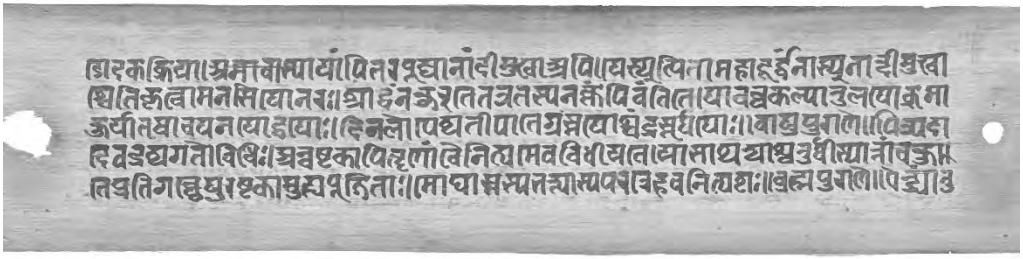


Folio 5 recto

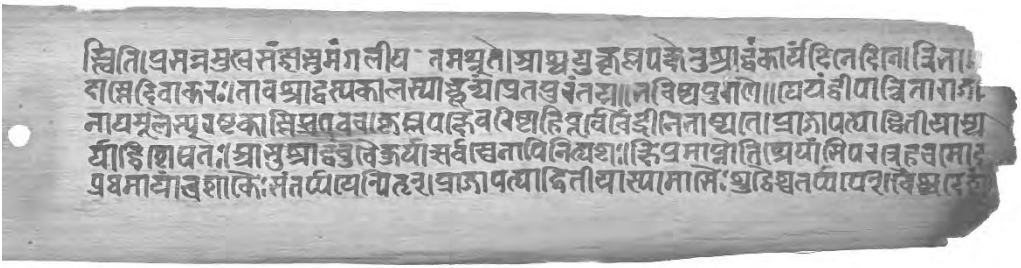
left



middle

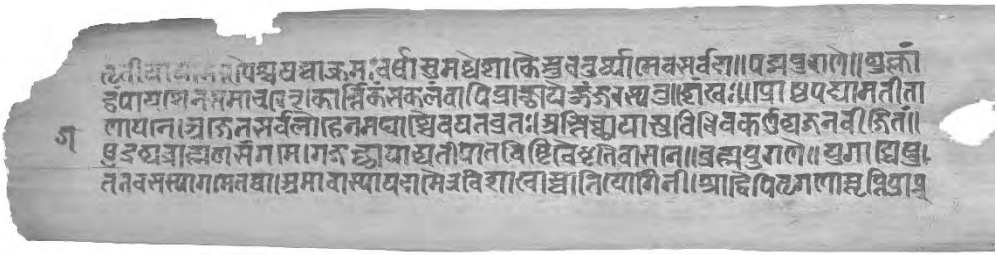


right

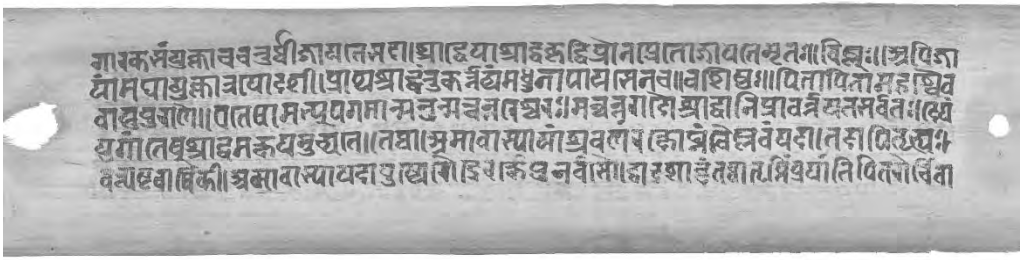


Folio 5 verso

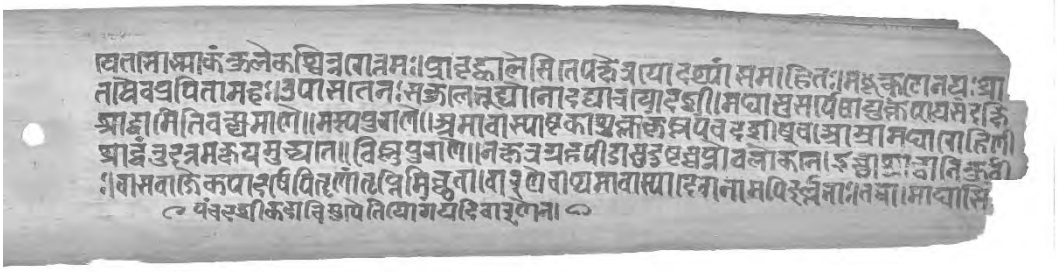
left



middle

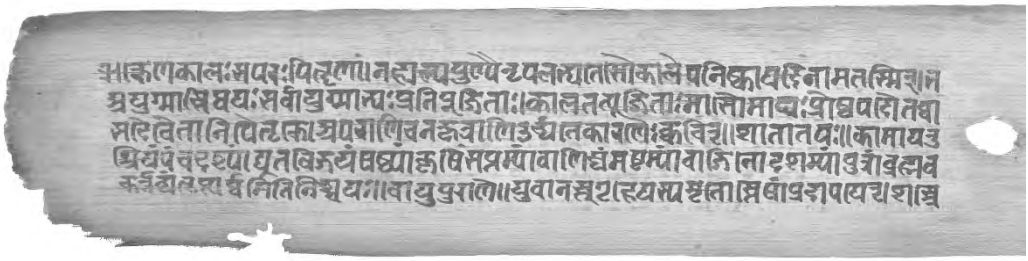


right

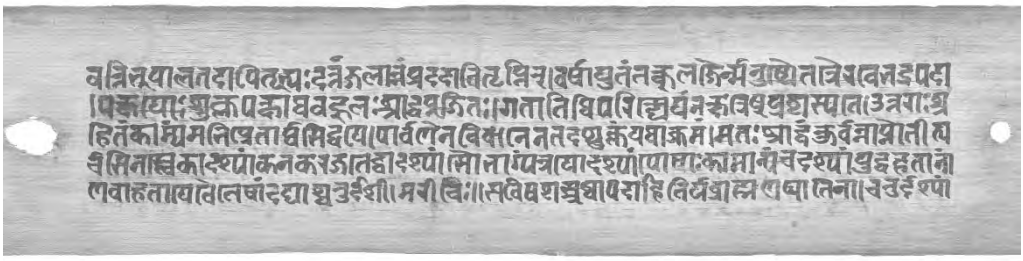


Folio 6 recto

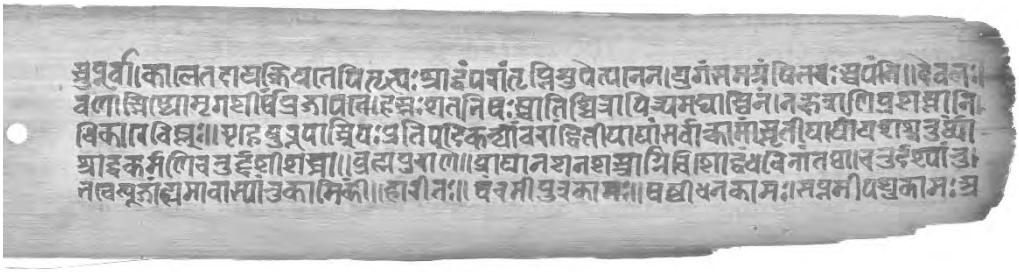
left



middle

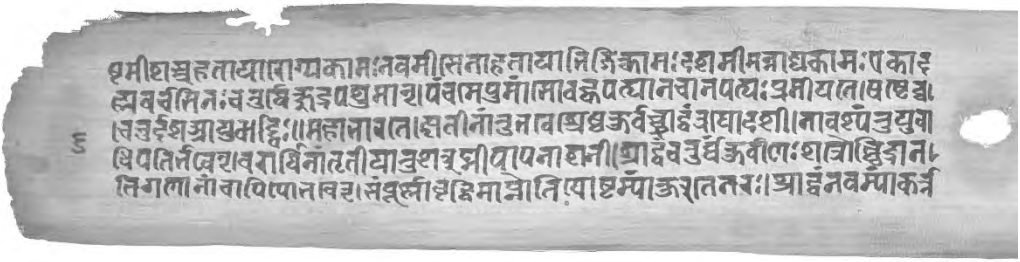


right

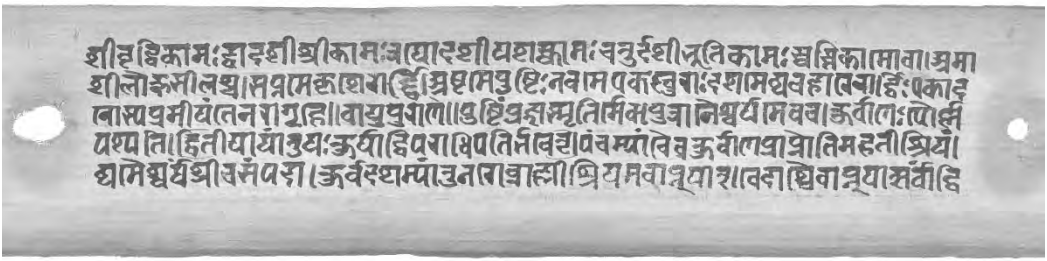


Folio 6 verso

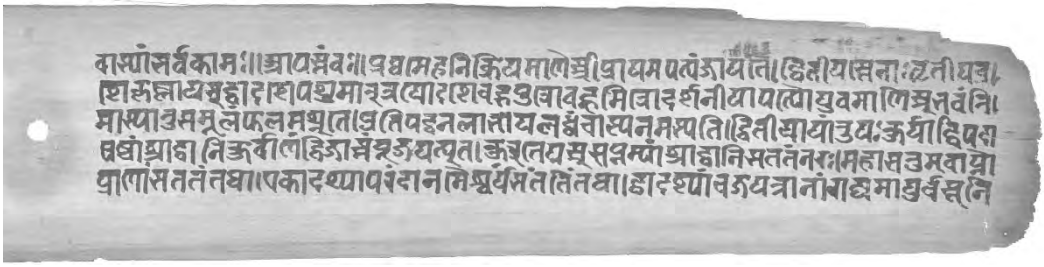
left



middle

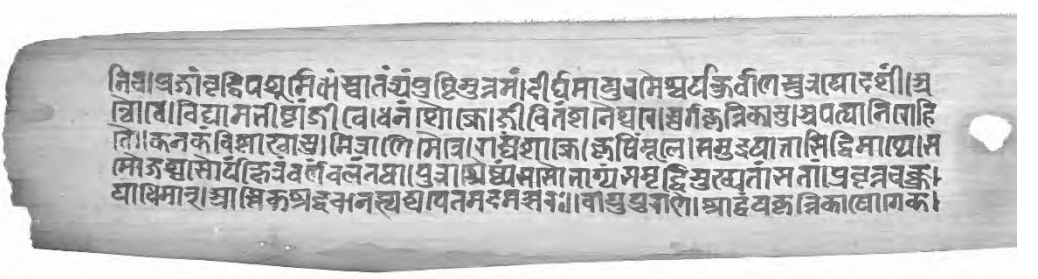


right

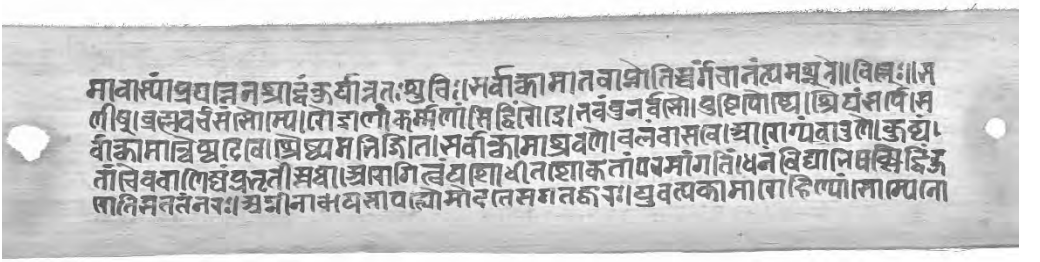


Folio 7 recto

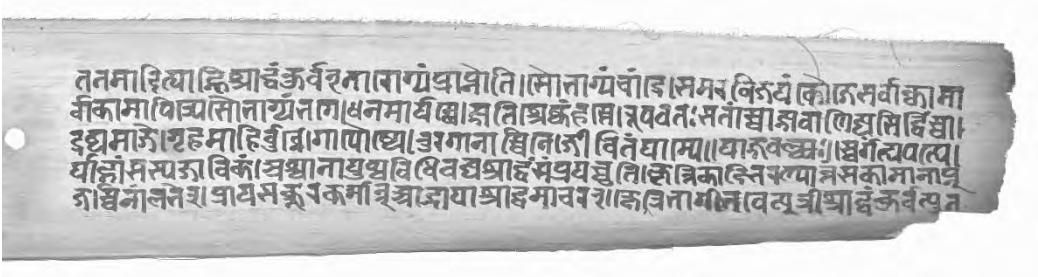
left



middle

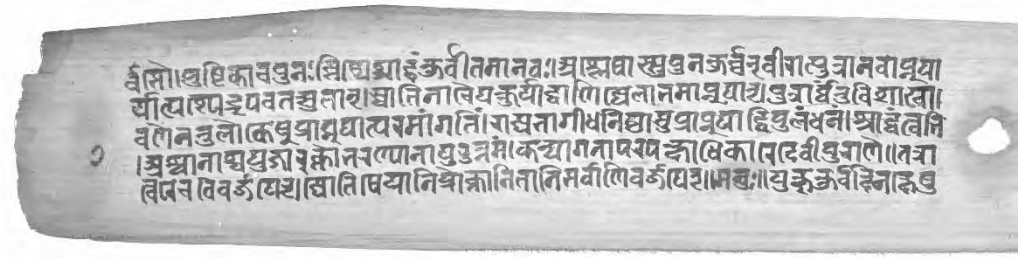


right

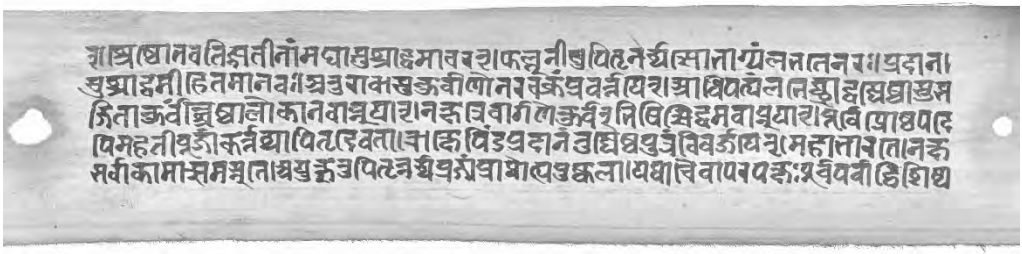


Folio 7 verso

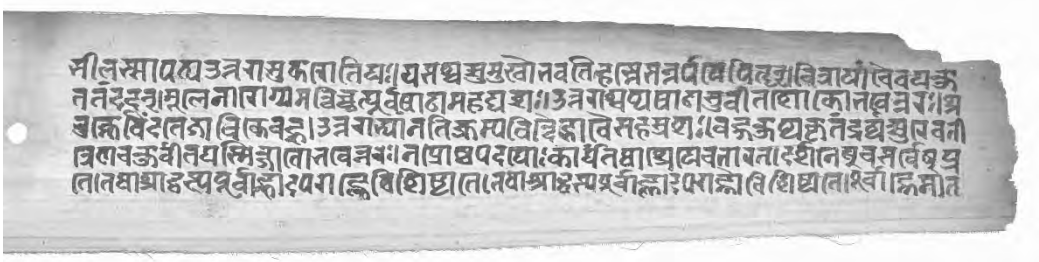
left



middle

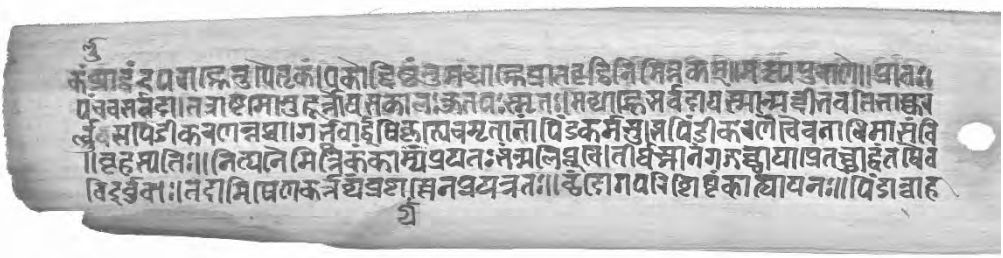


right

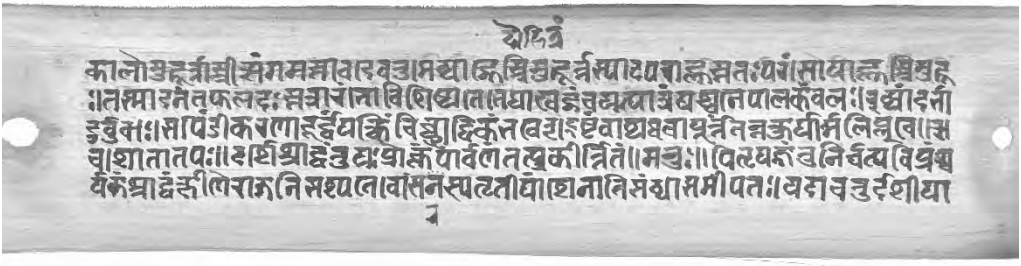


Folio 8 recto

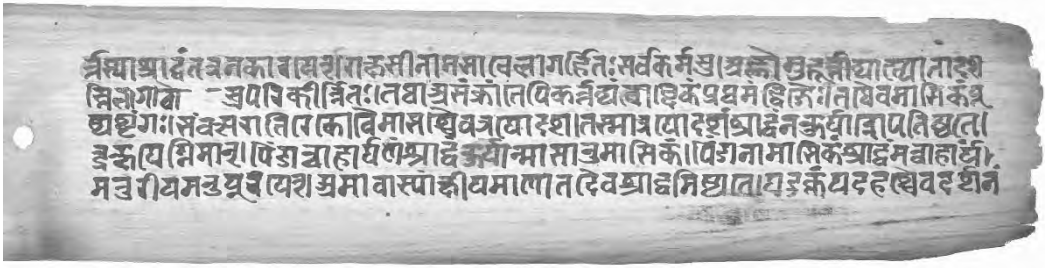
left



middle

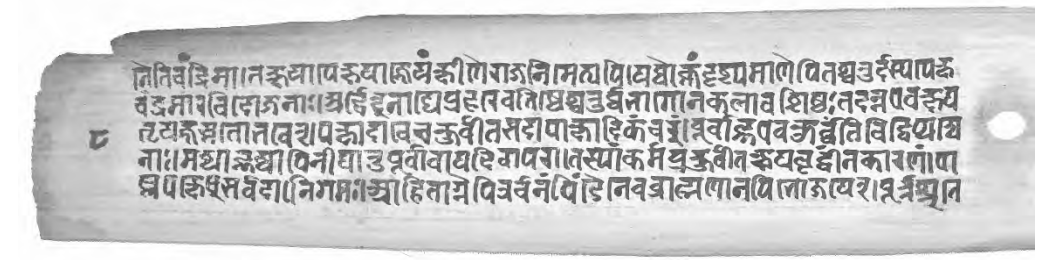


right

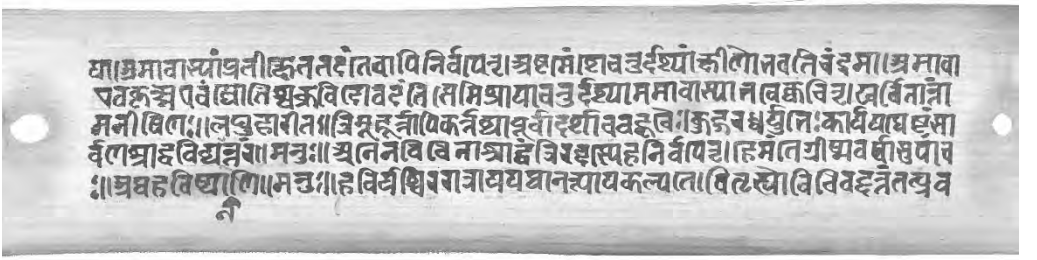


Folio 8 verso

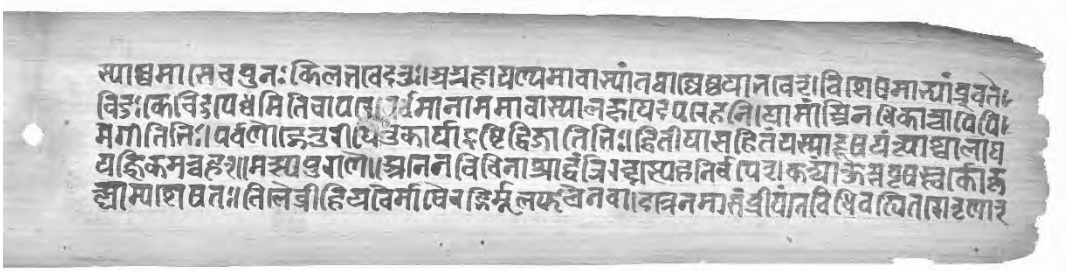
left



middle

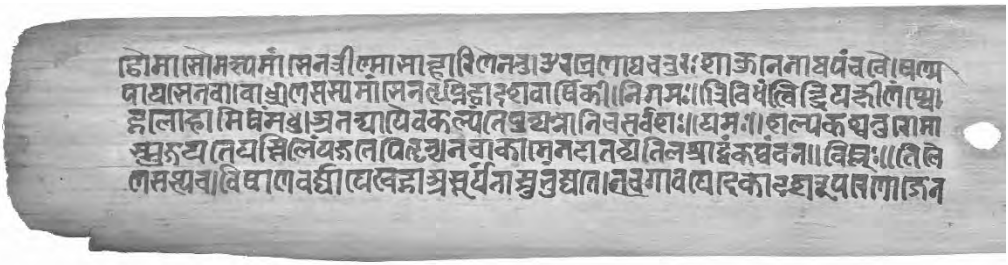


right

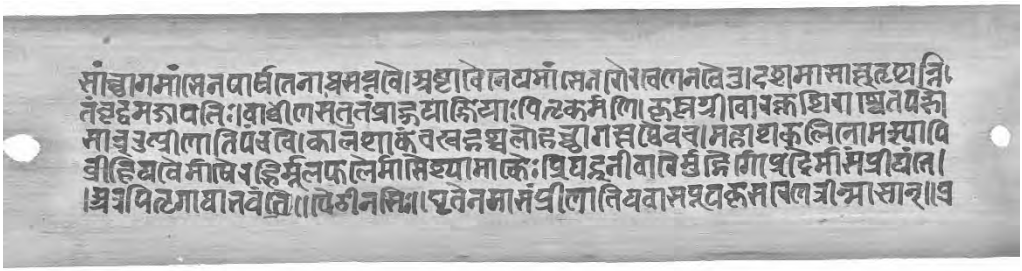


Folio 9 recto

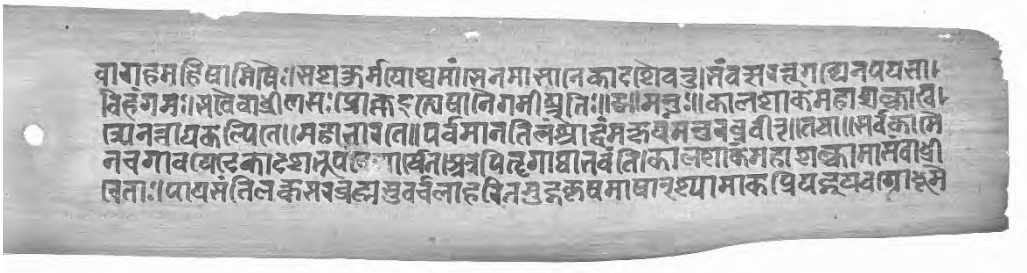
left



middle

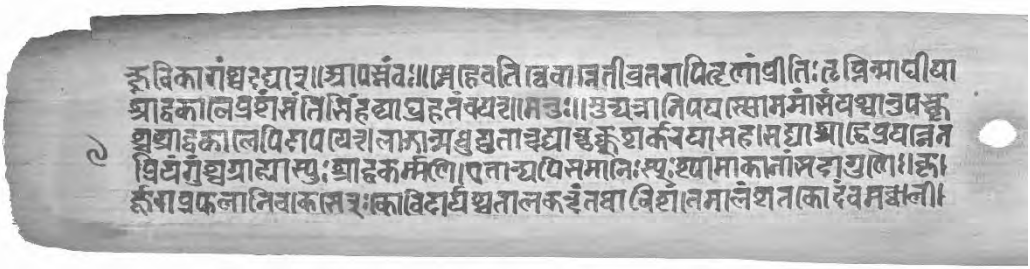


right

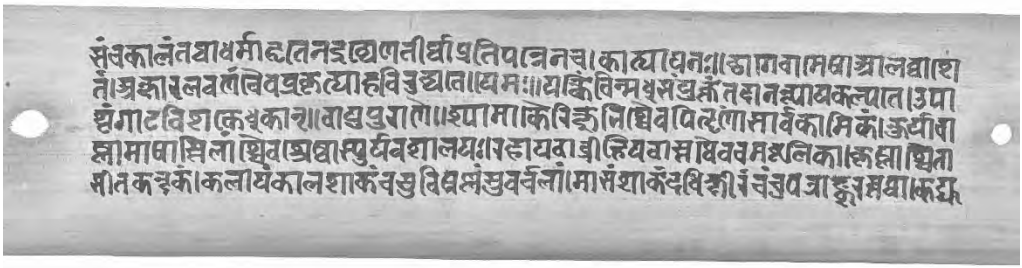


Folio 9 verso

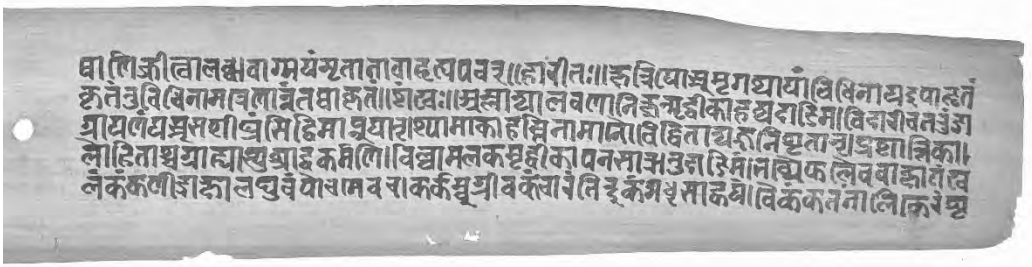
left



middle



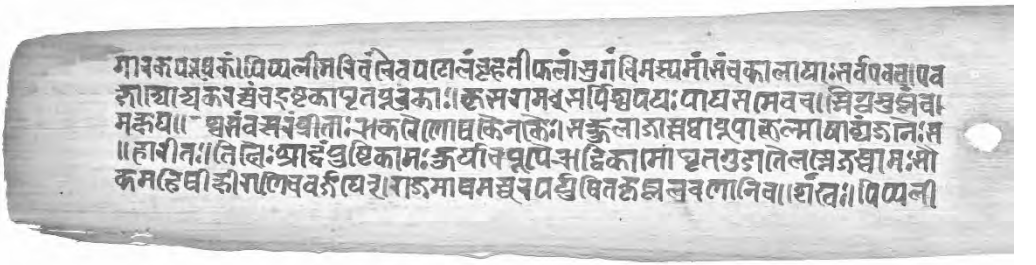
right



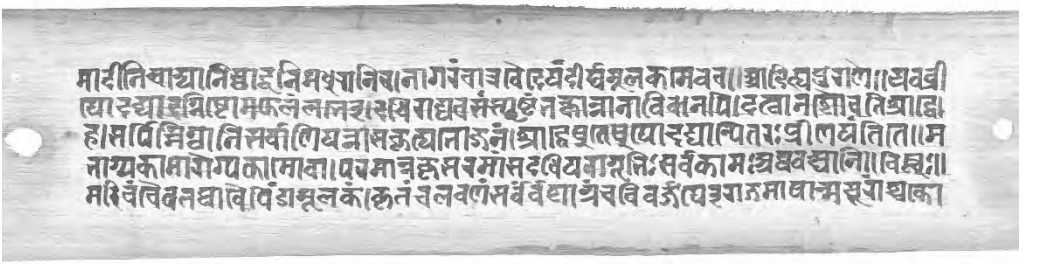
(30)

Folio 10 recto

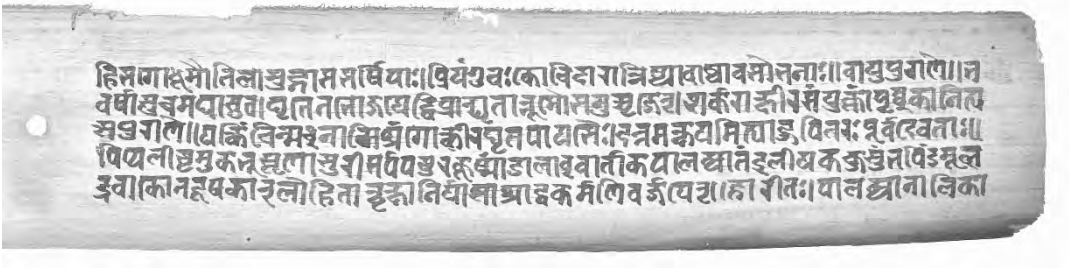
left



middle

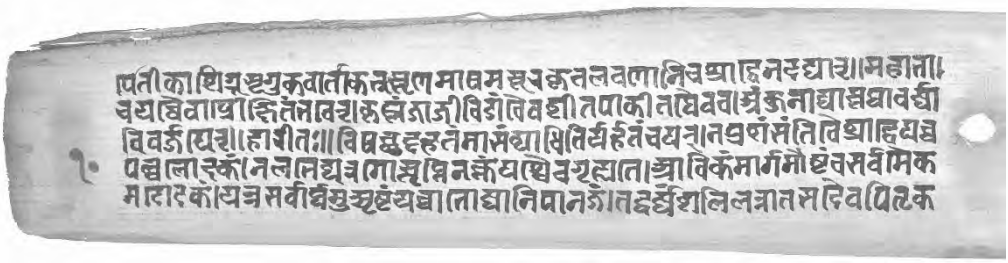


right

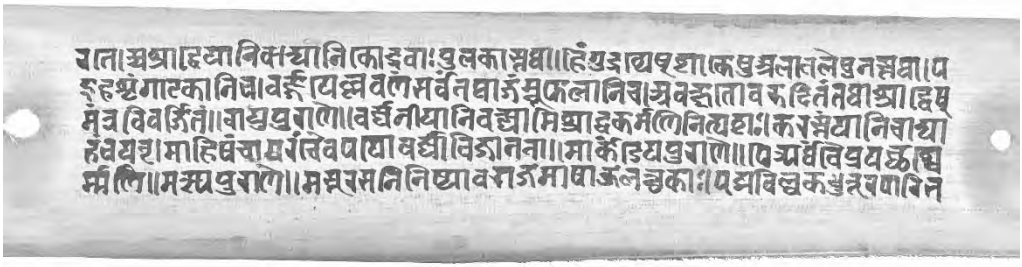


Folio 10 verso

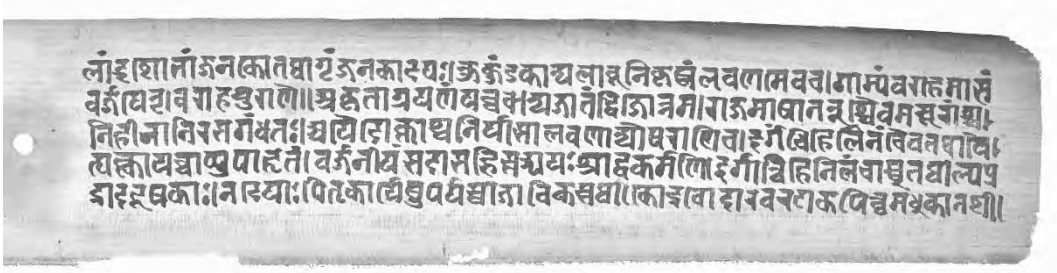
left



middle

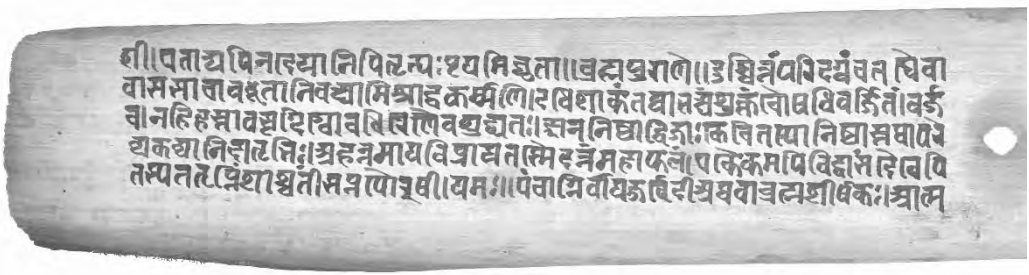


right

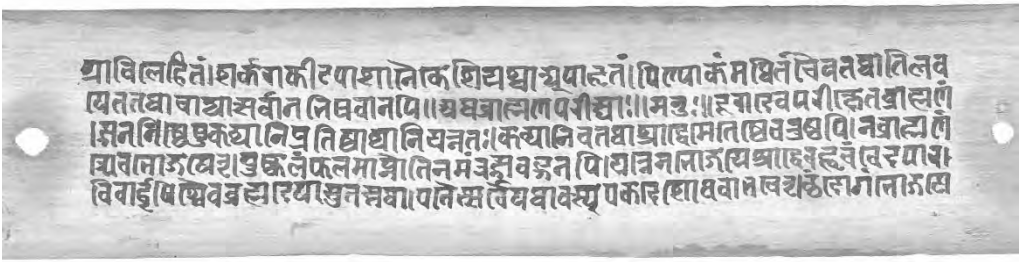


Folio 11 recto

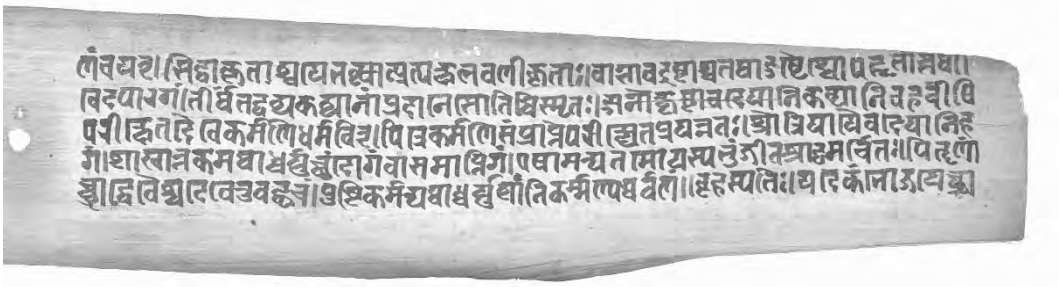
left



middle

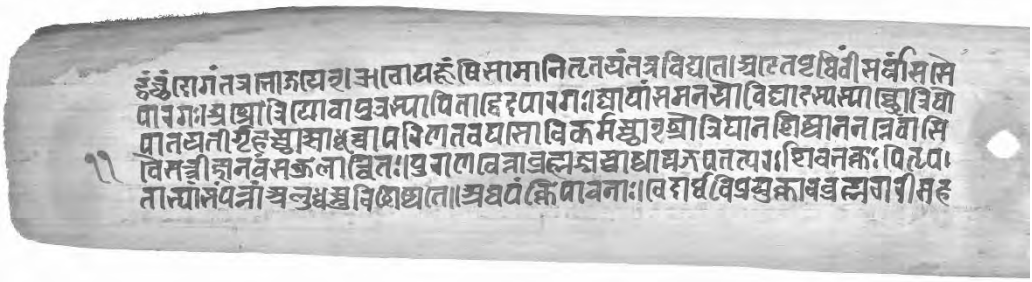


right

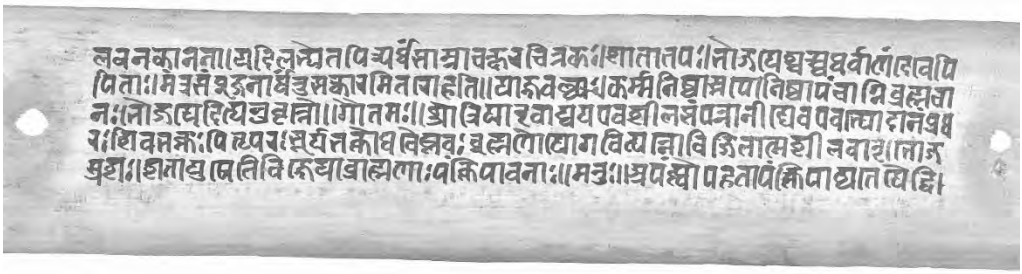


Folio 11 verso

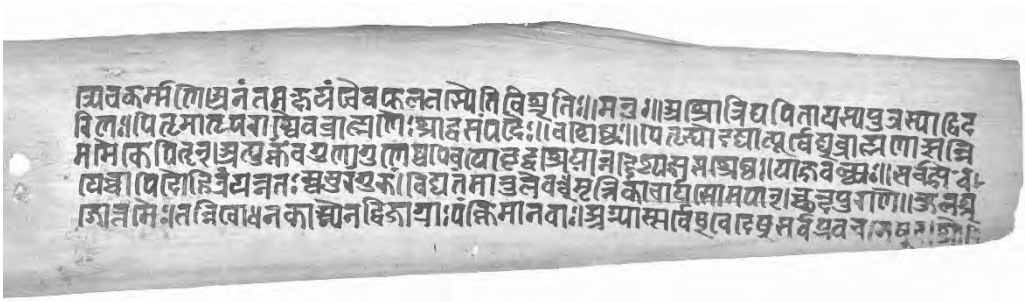
left



middle

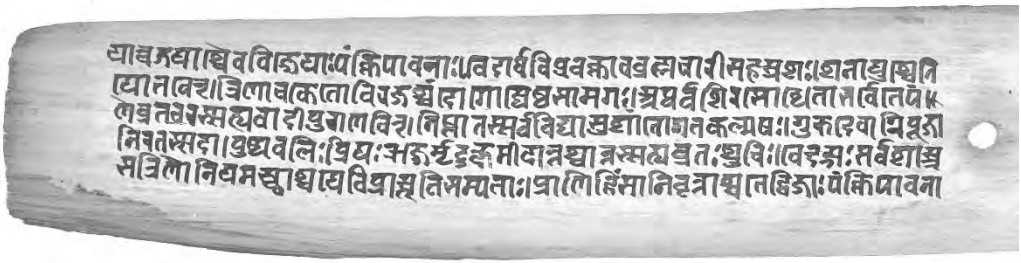


right

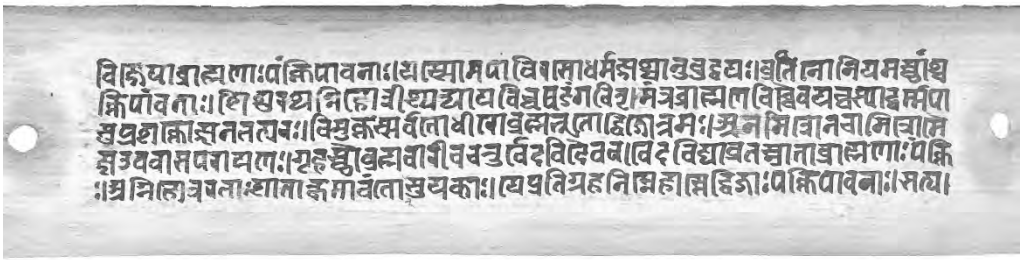


Folio 12 recto

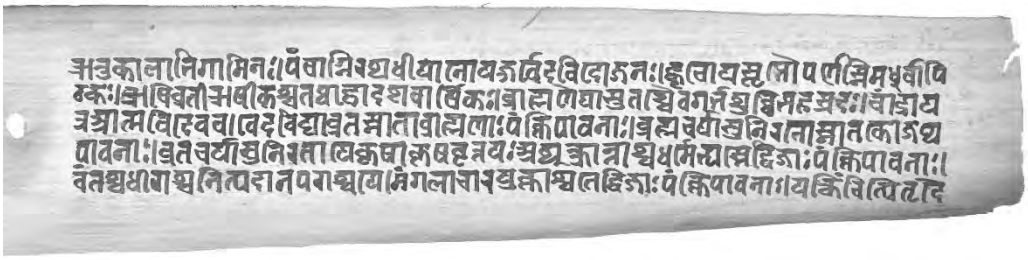
left



middle

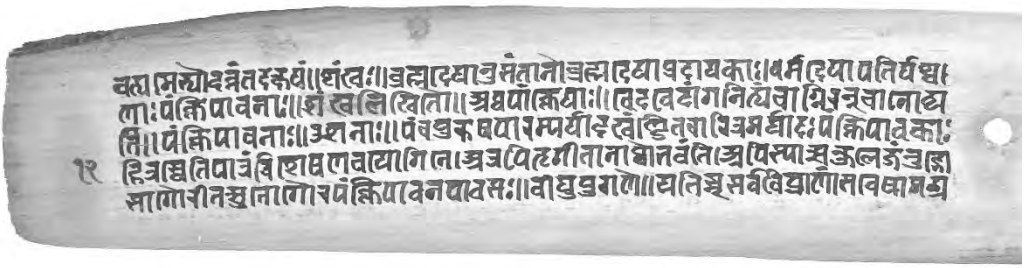


right

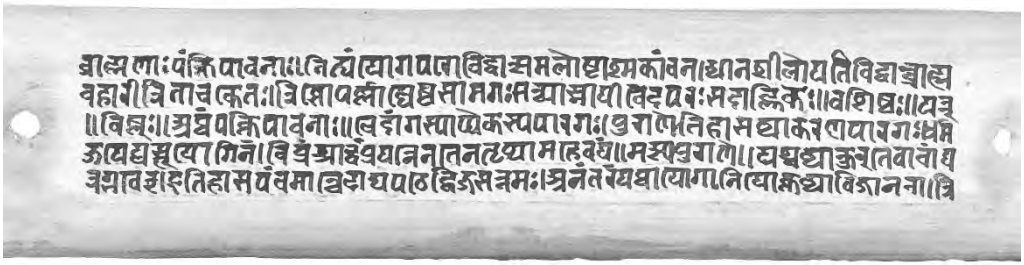


Folio 12 verso

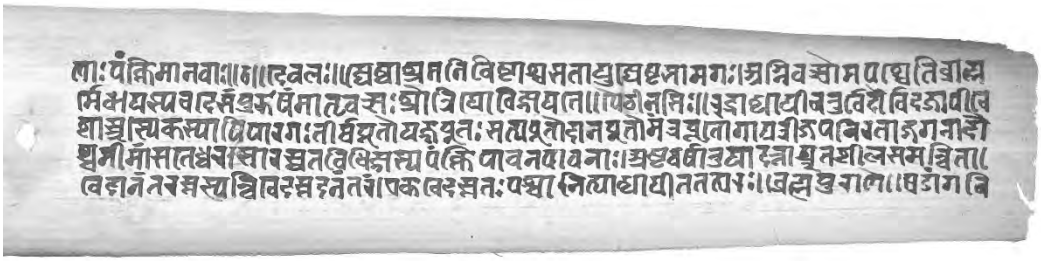
left



middle

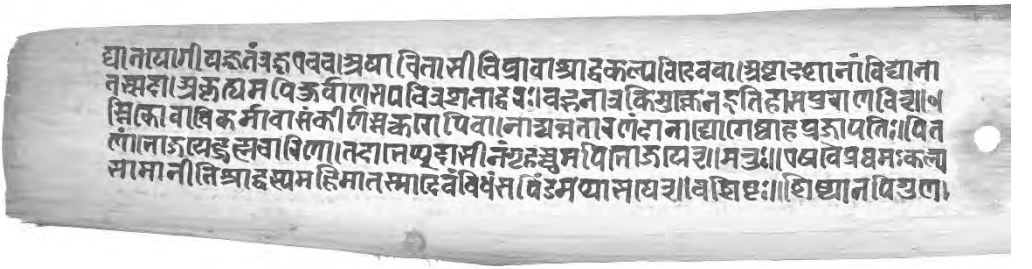


right

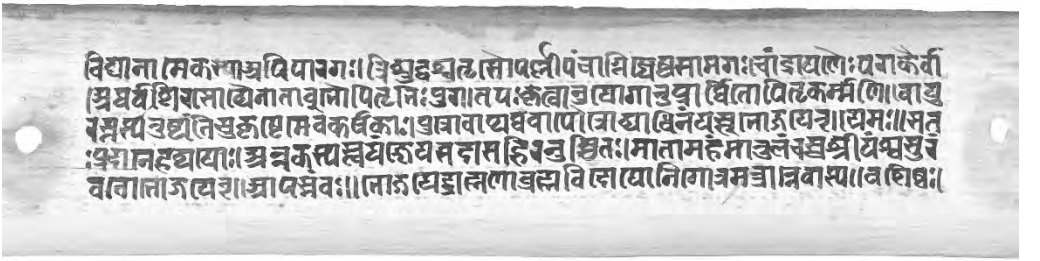


Folio 13 recto

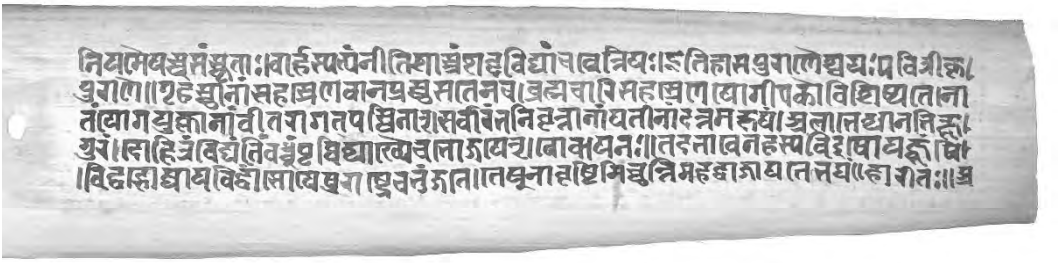
left



middle

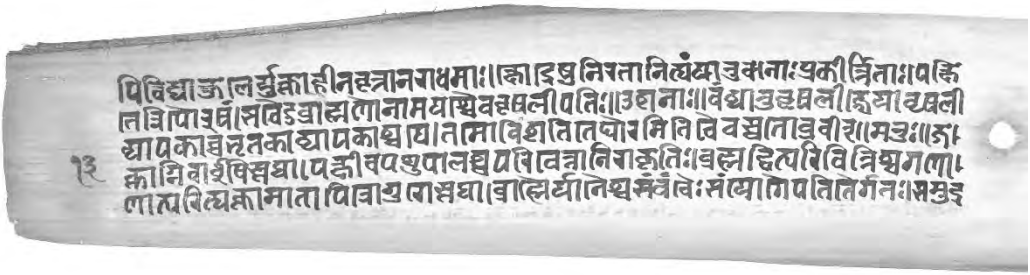


right

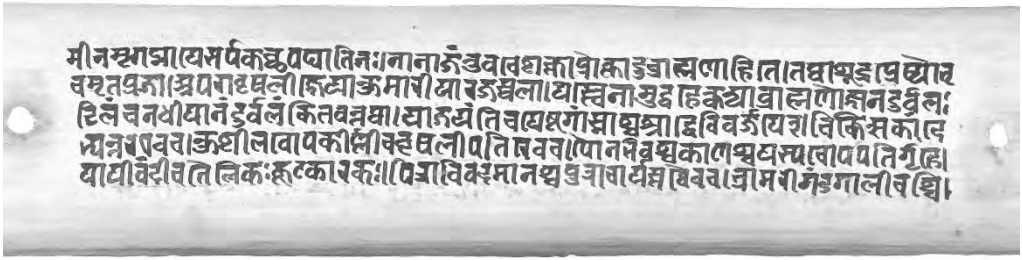


Folio 13 verso

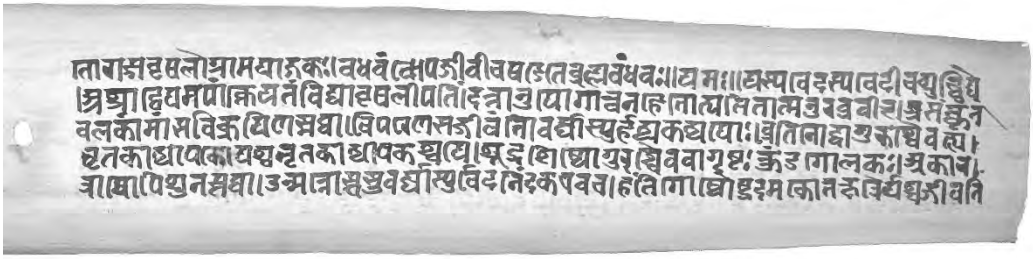
left



middle

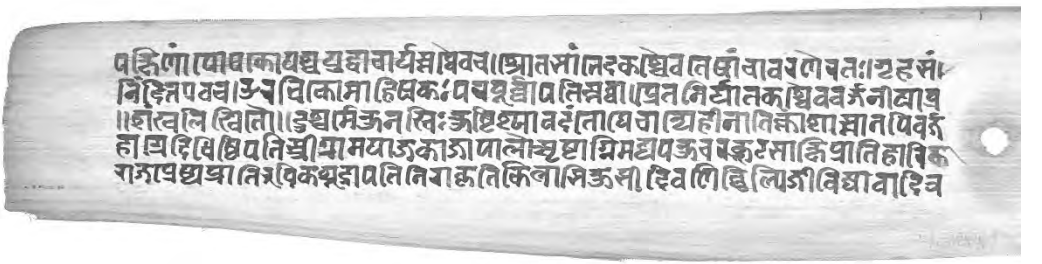


right

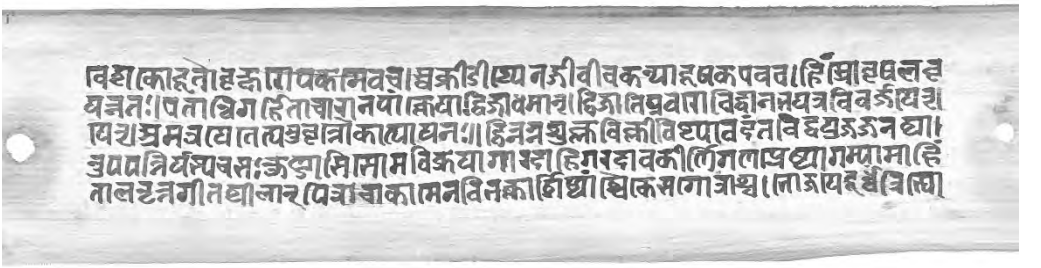


Folio 14 recto

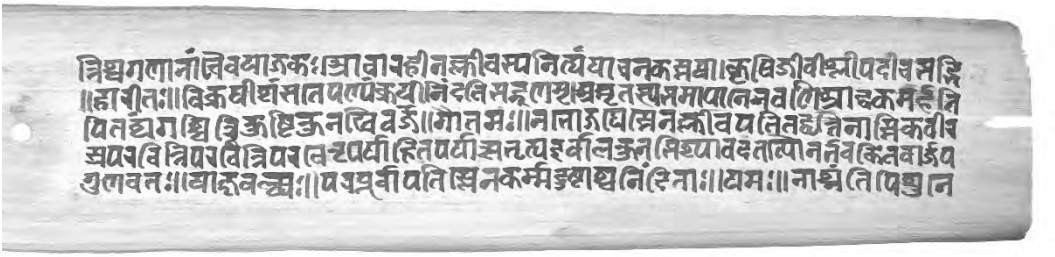
left



middle

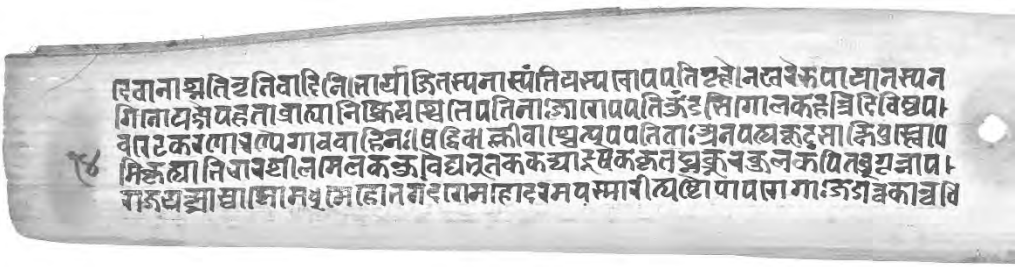


right

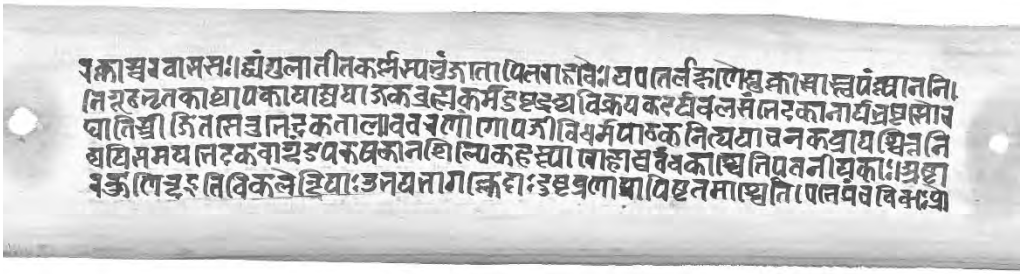


Folio 14 verso

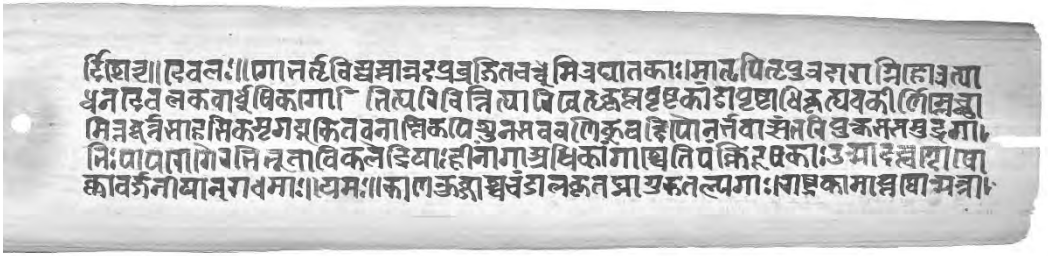
left



middle

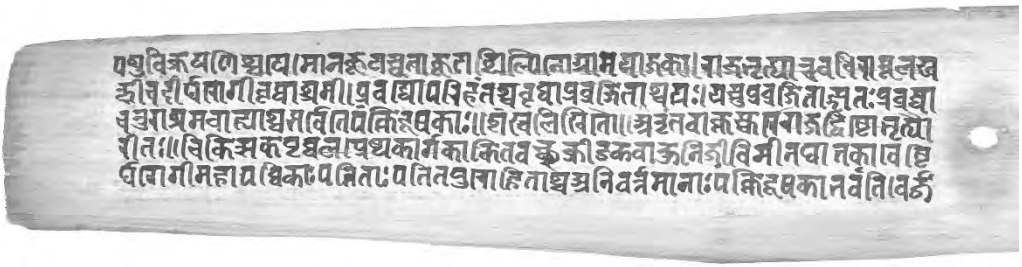


right

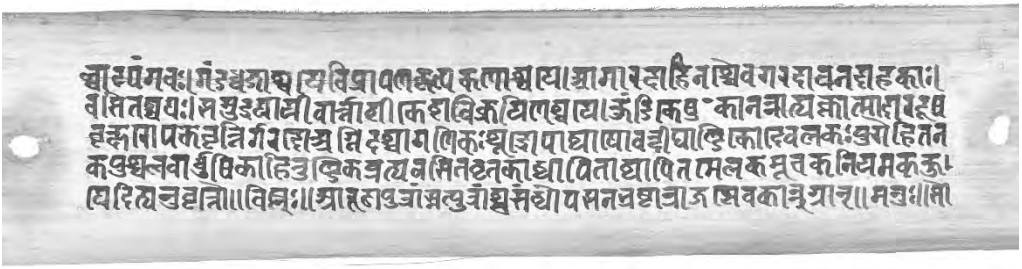


Folio 15 recto

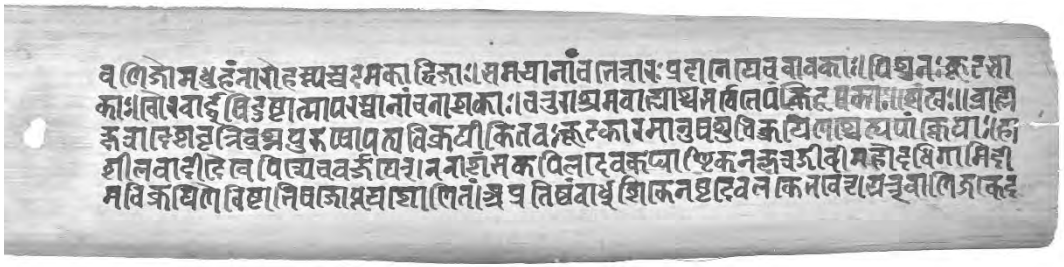
left



middle

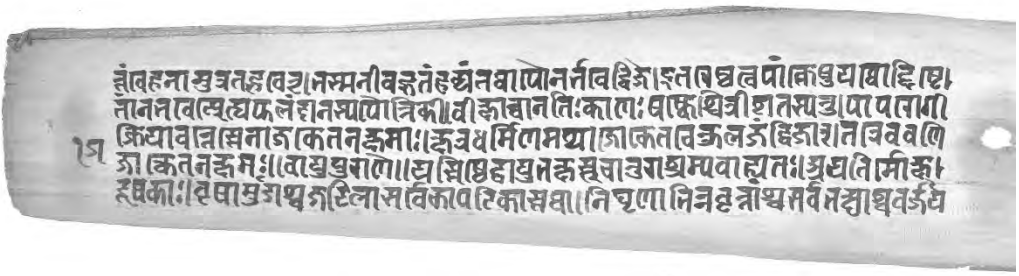


right

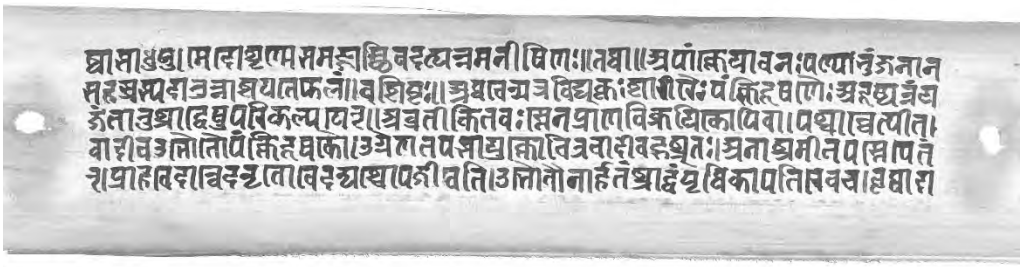


Folio 15 verso

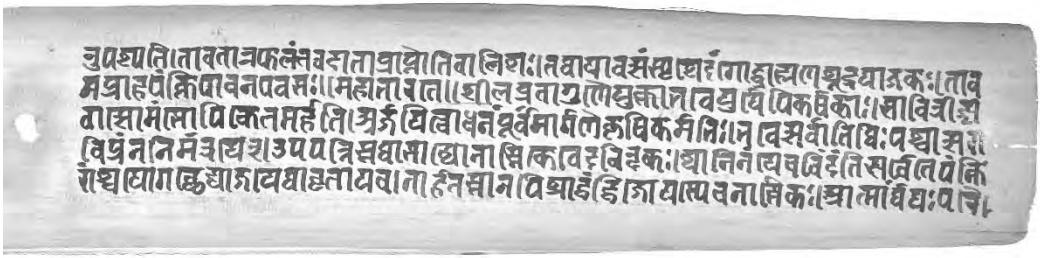
left



middle

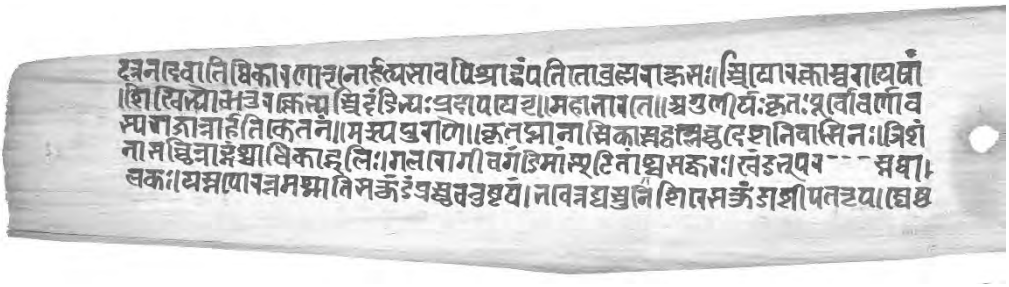


right

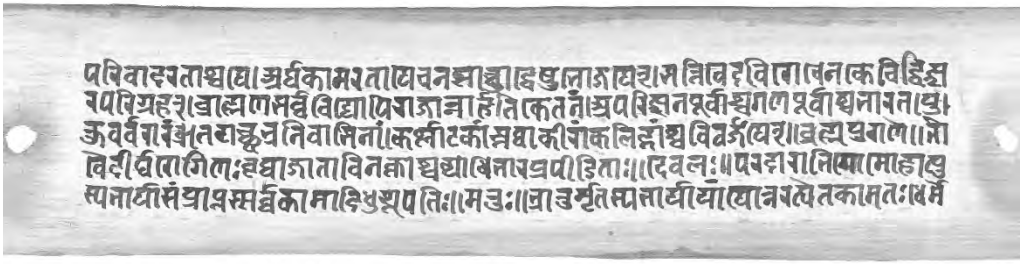


Folio 16 recto

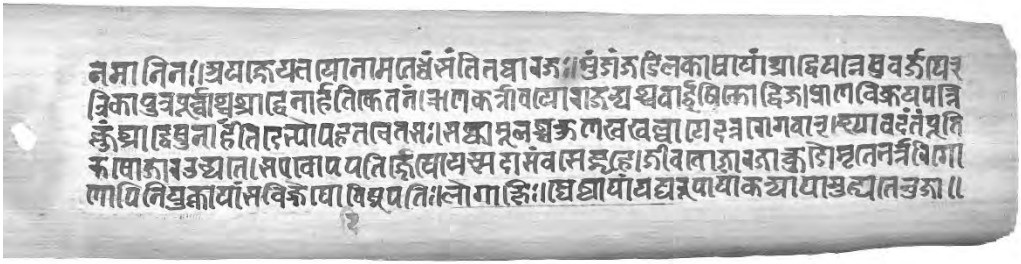
left



middle

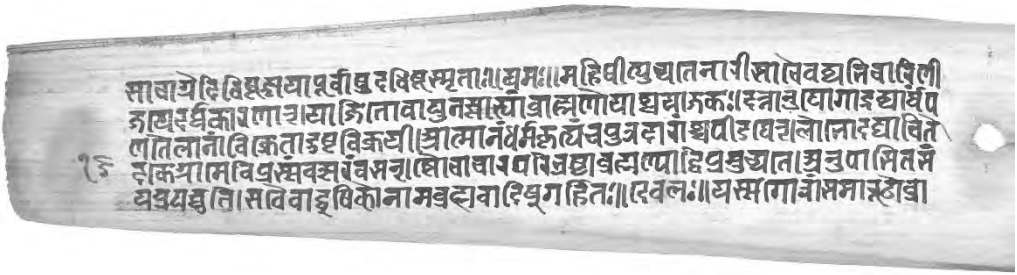


right

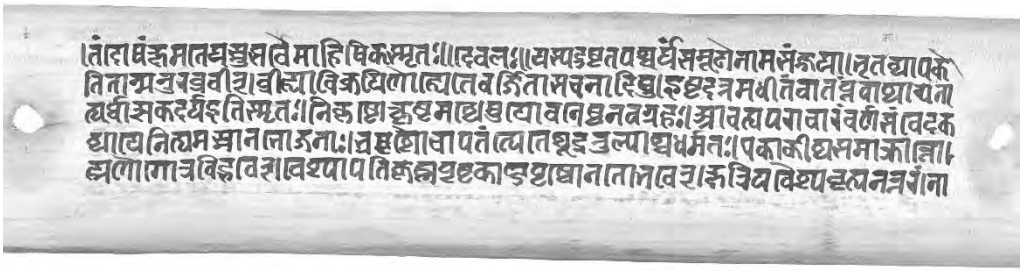


Folio 16 verso

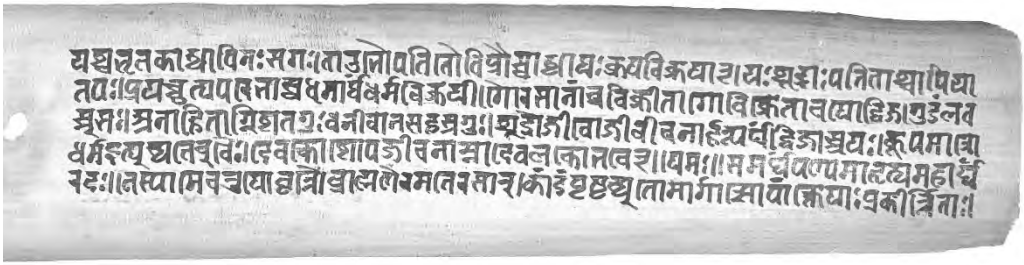
left



middle

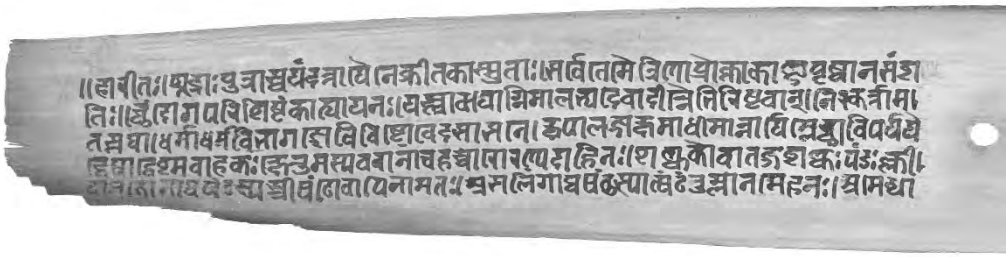


right

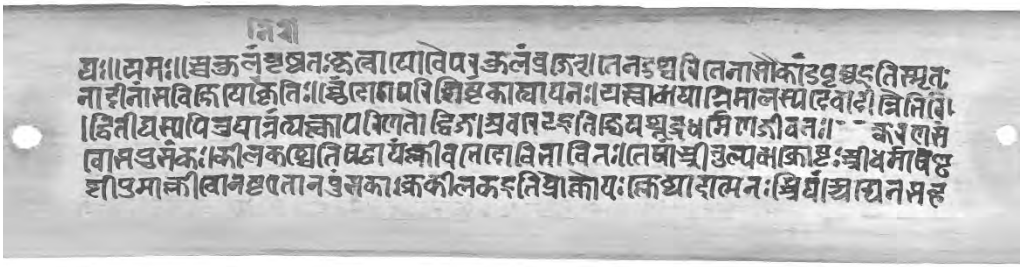


Folio 17 recto

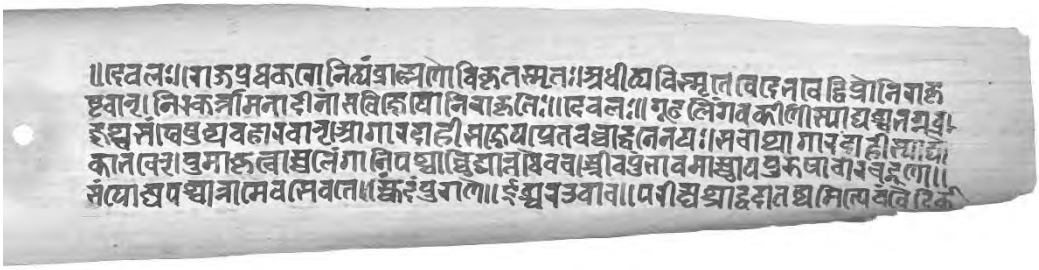
left



middle



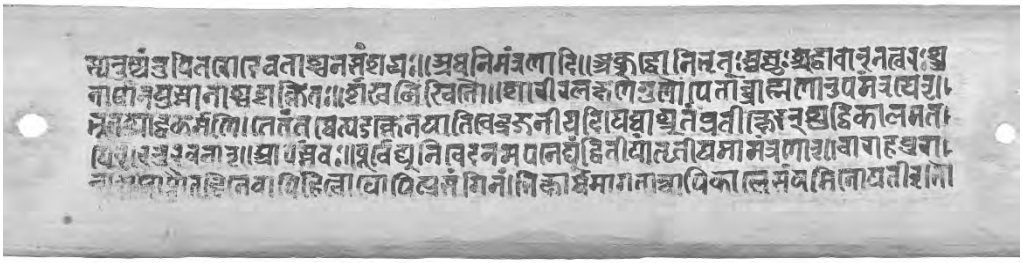
right



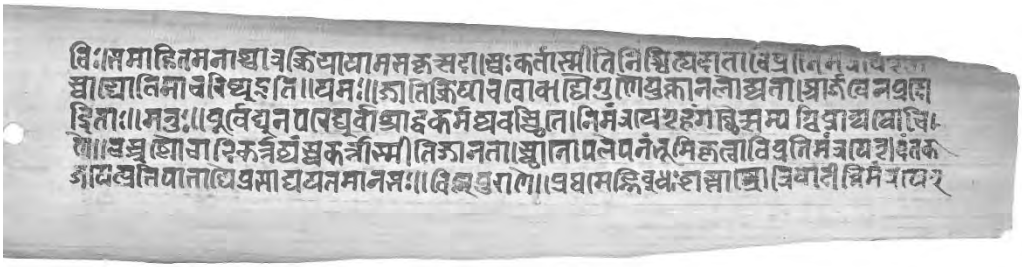
Folio 17 verso

left

middle



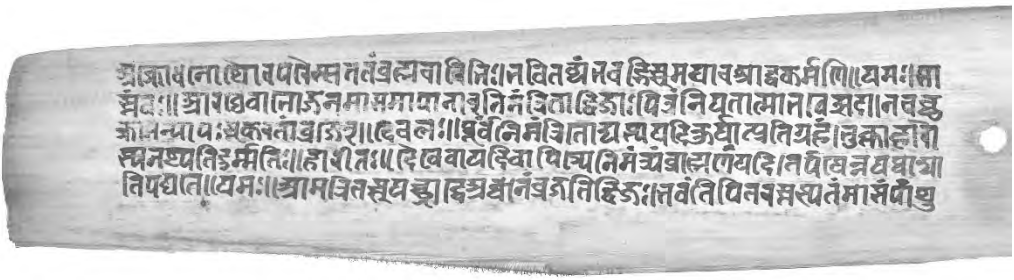
right



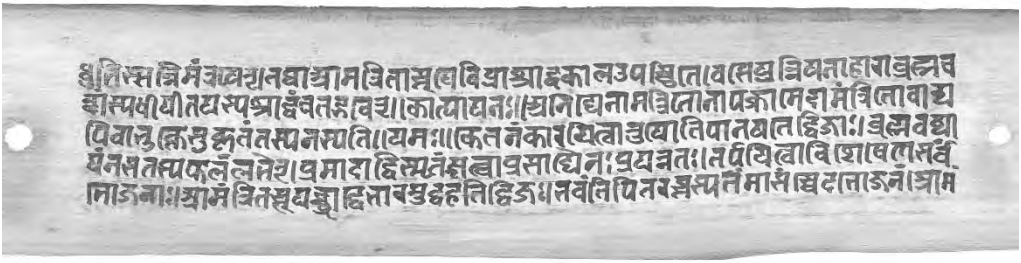
(46)

Folio 18 recto

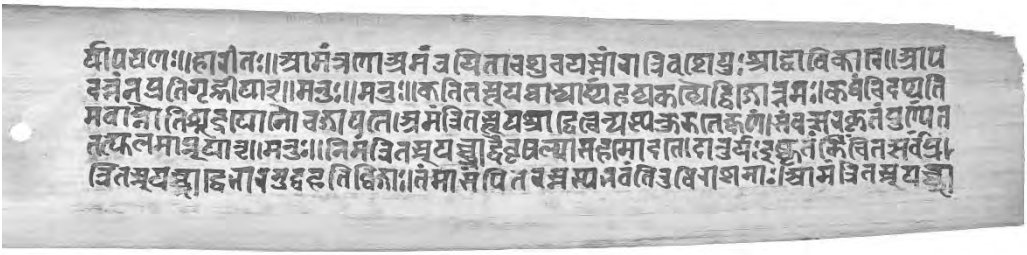
left



middle

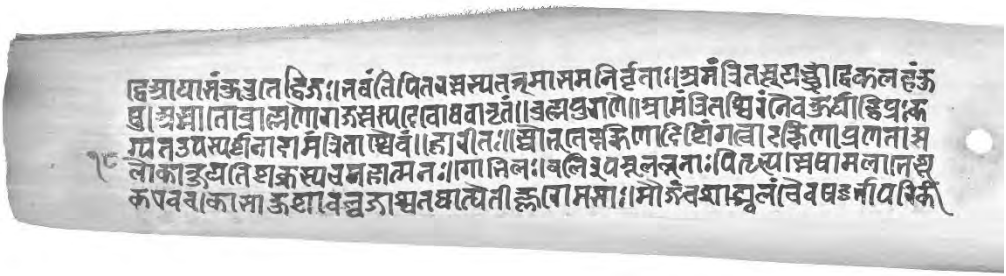


right

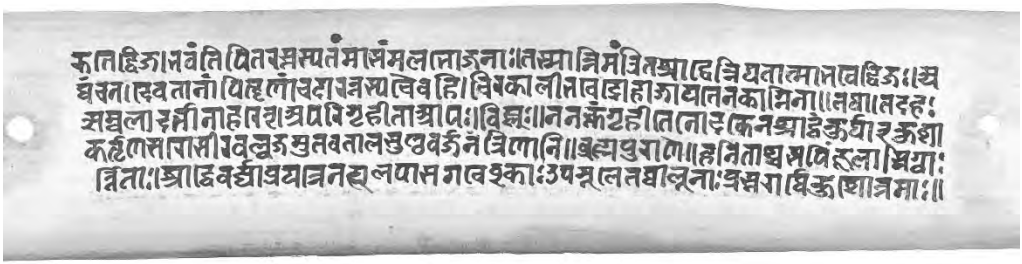


Folio 18 verso

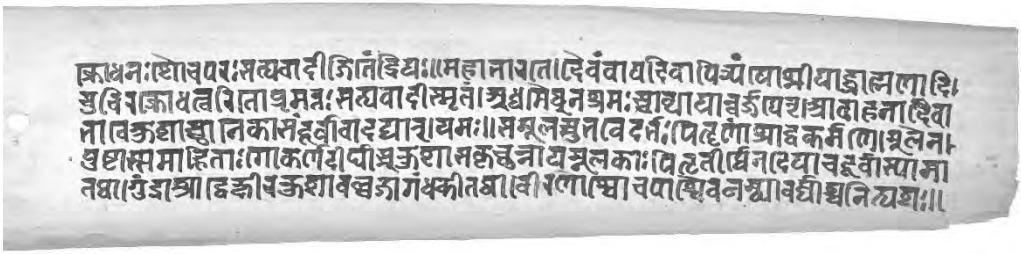
left



middle

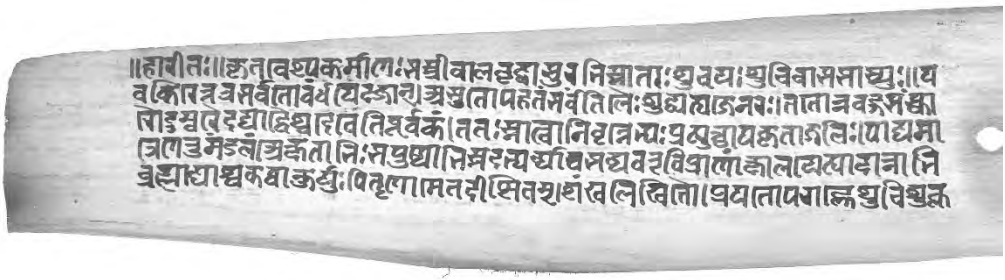


right

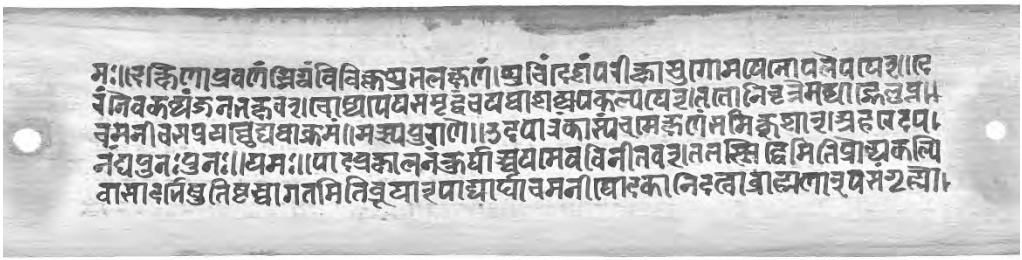


Folio 19 recto

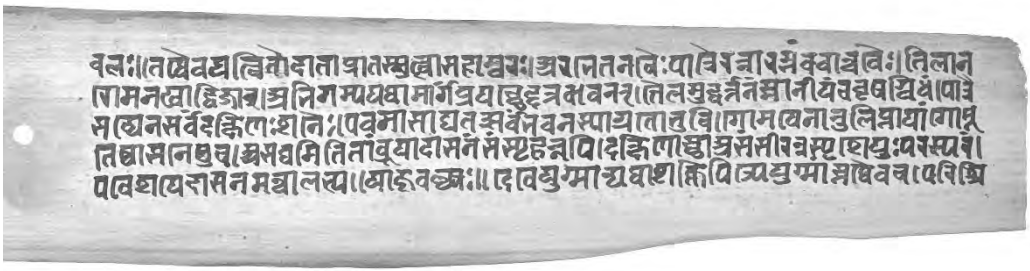
left



middle

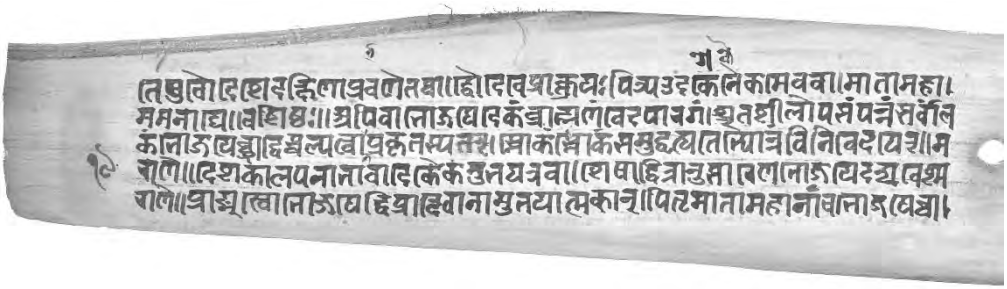


right

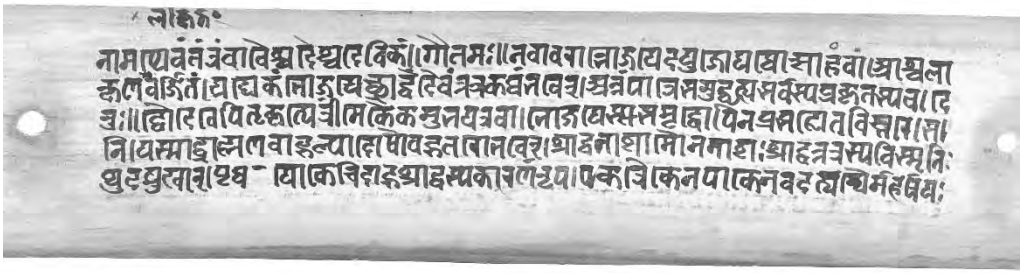


Folio 19　verso

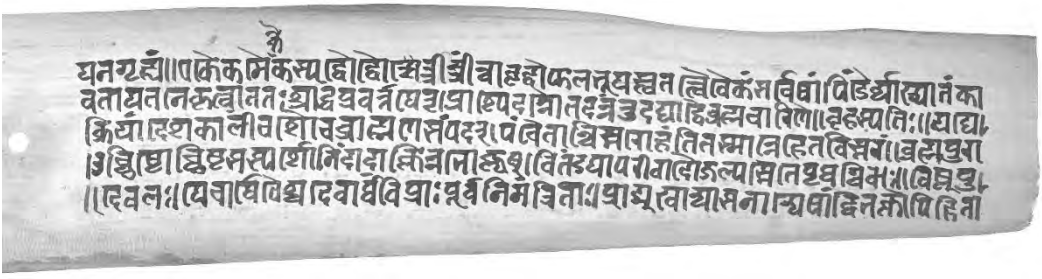
left



middle

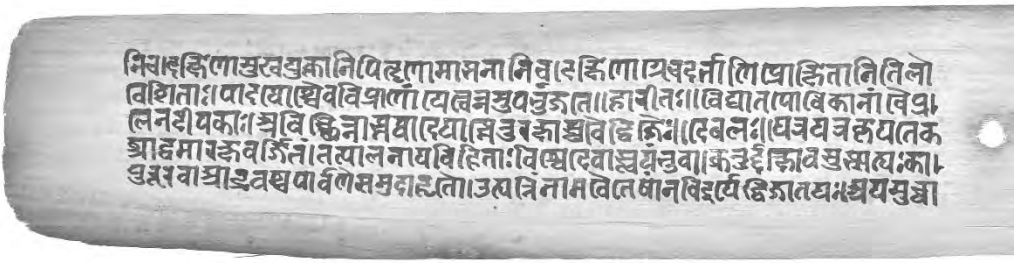


right

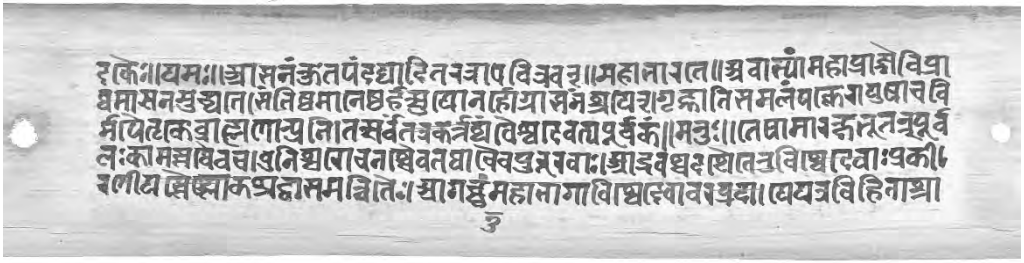


Folio 20 recto

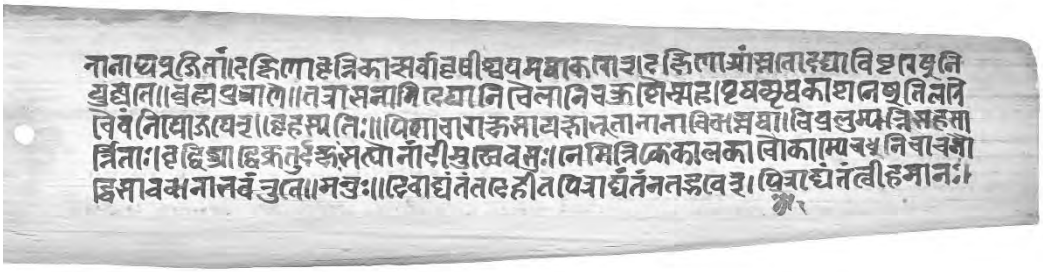
left



middle

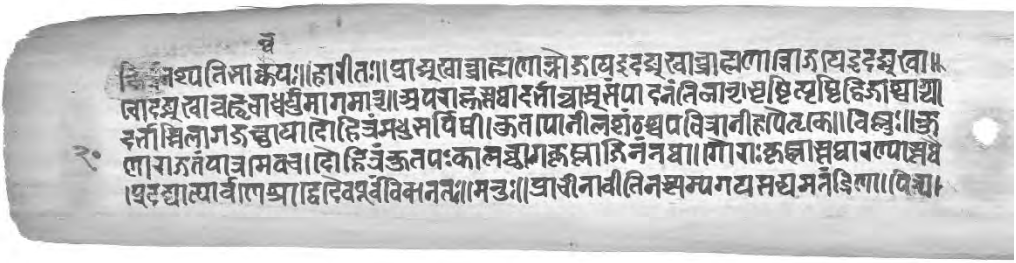


right

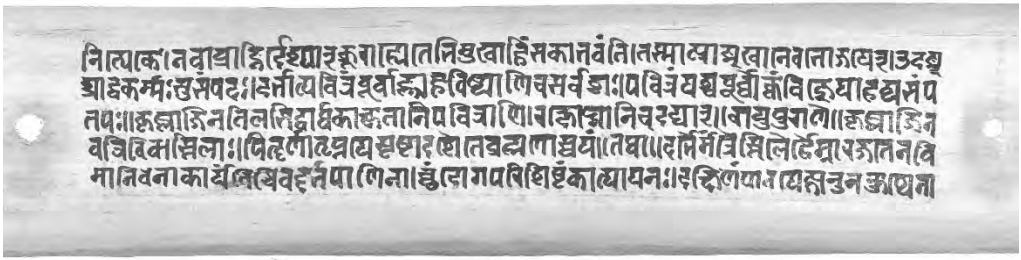


Folio 20 verso

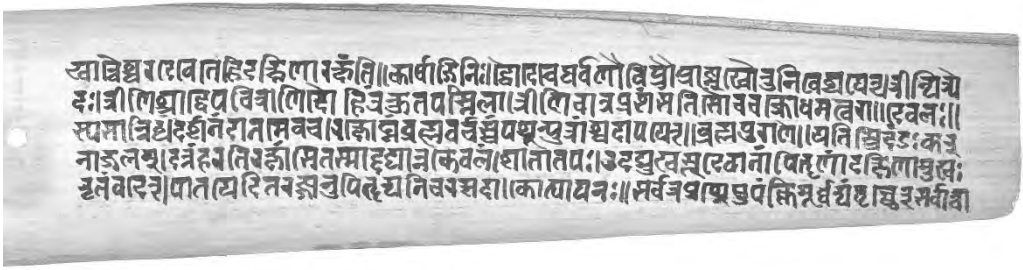
left



middle

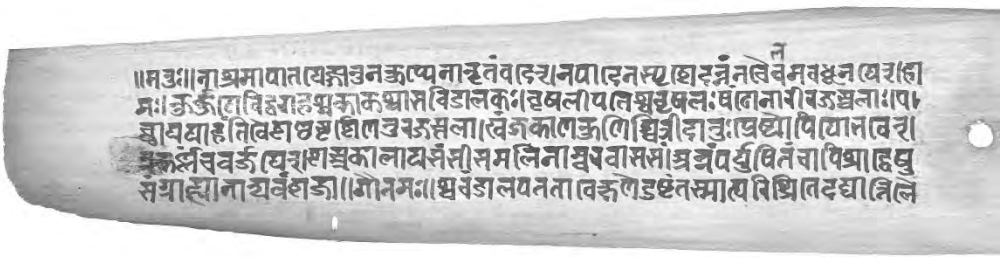


right

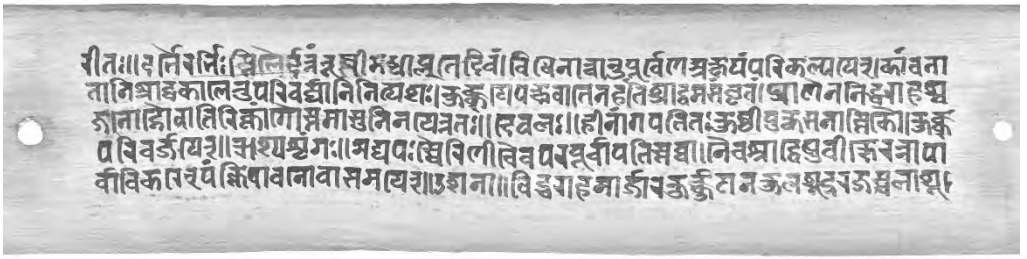


Folio 21 recto

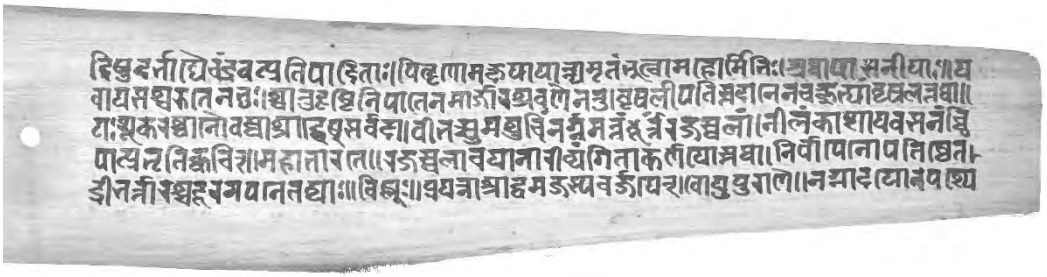
left



middle

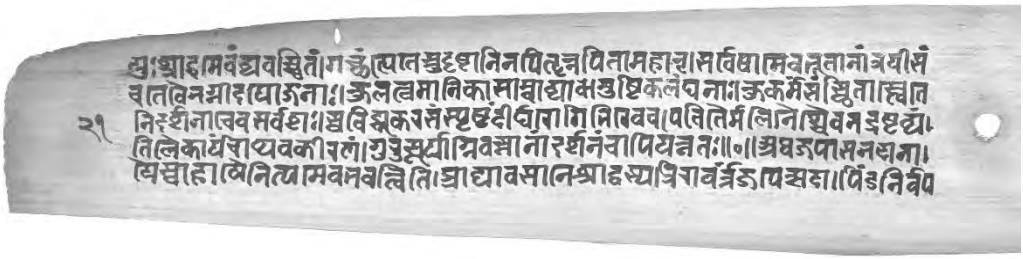


right

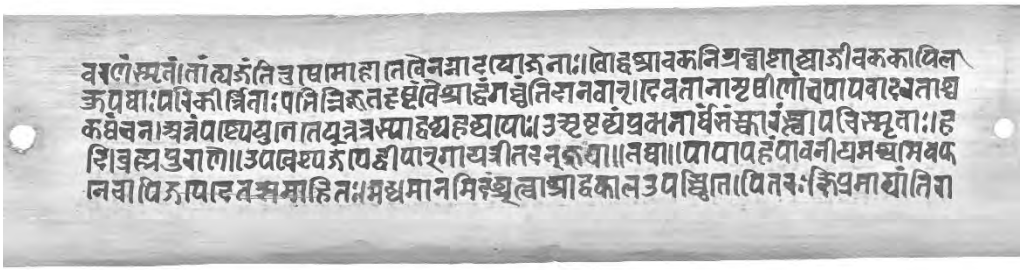


Folio 21 verso

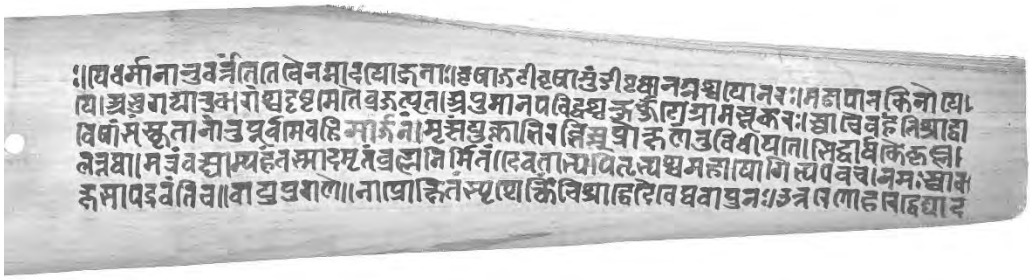
left



middle

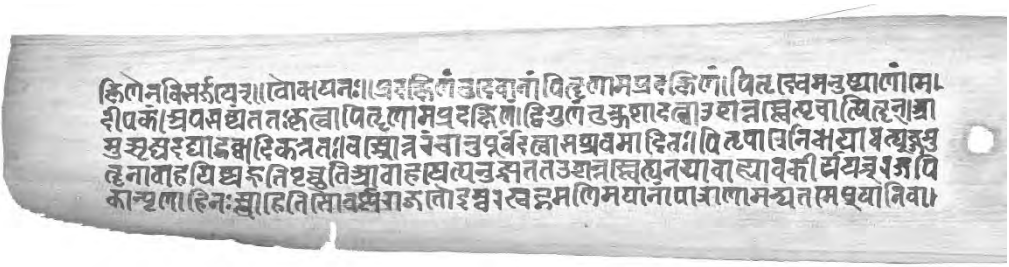


right

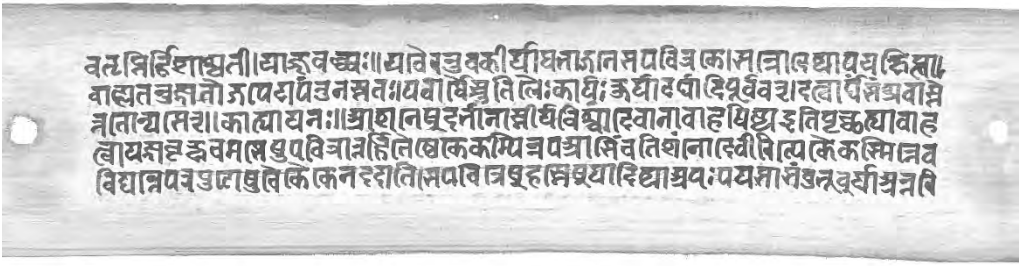


Folio 22 recto

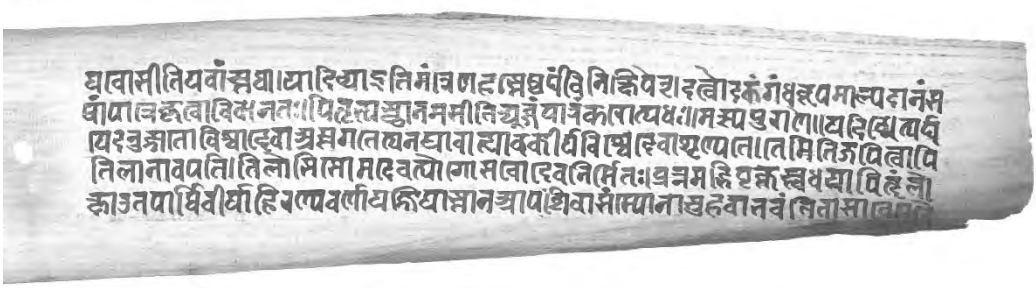
left



middle

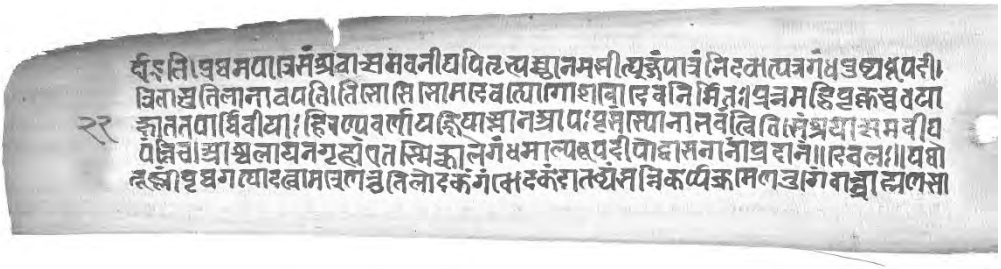


right

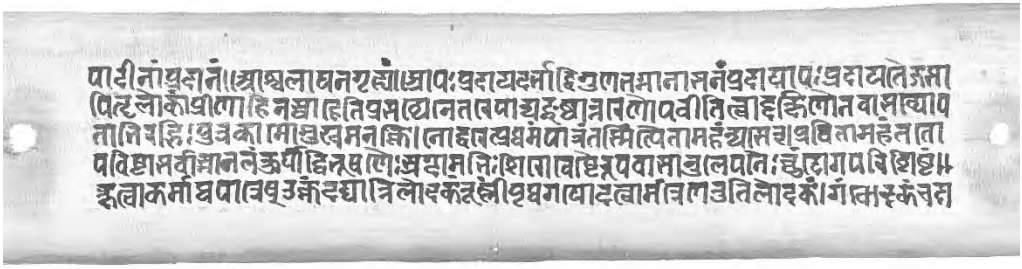


Folio 22 verso

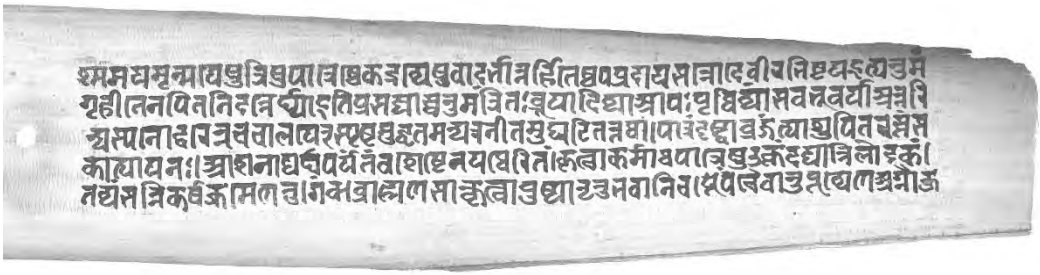
left



middle

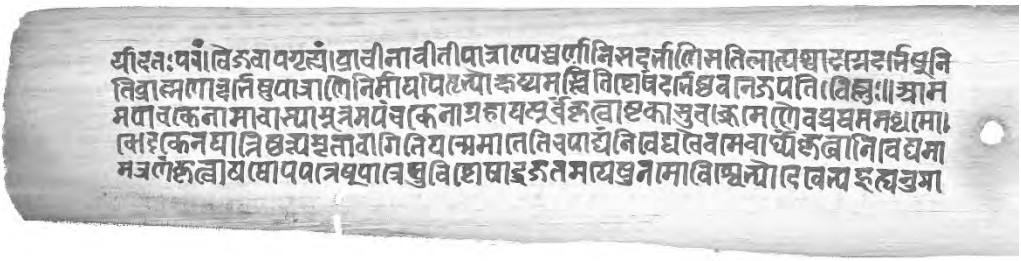


right

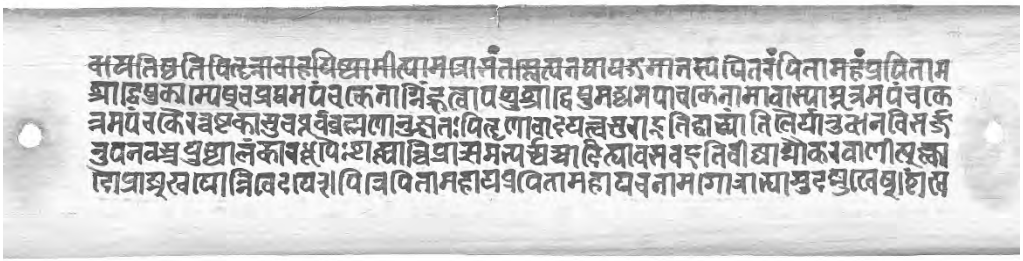


Folio 23 recto

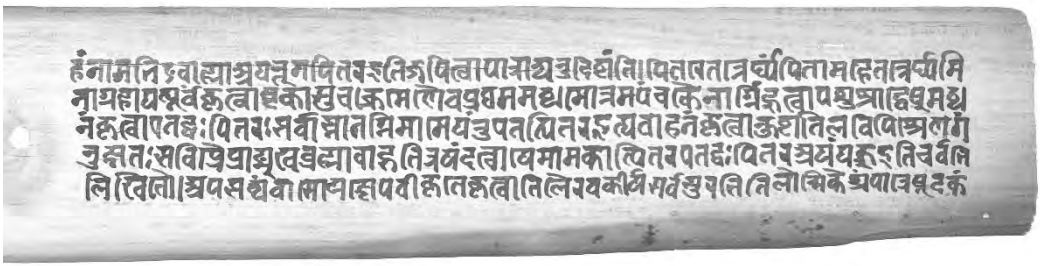
left



middle

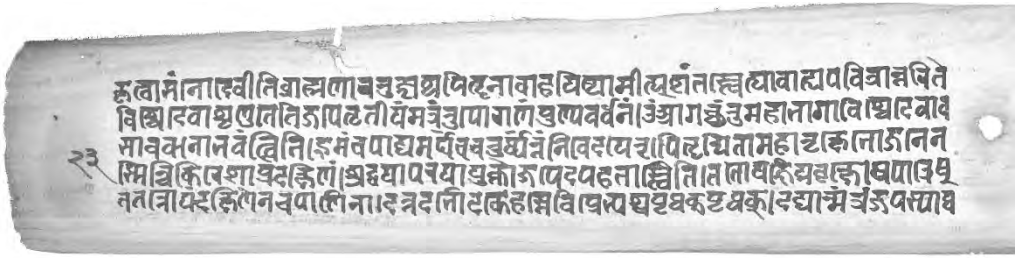


right

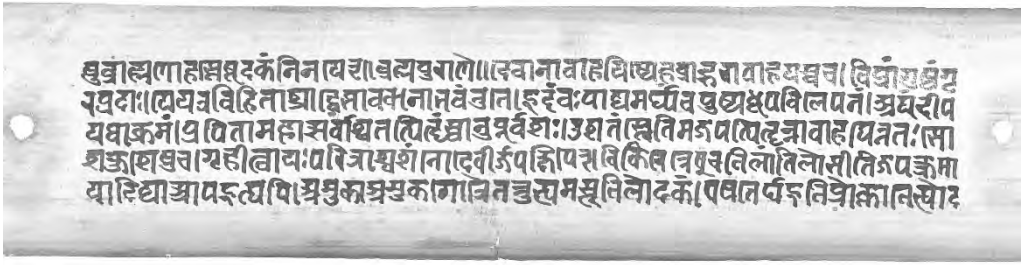


Folio 23 verso

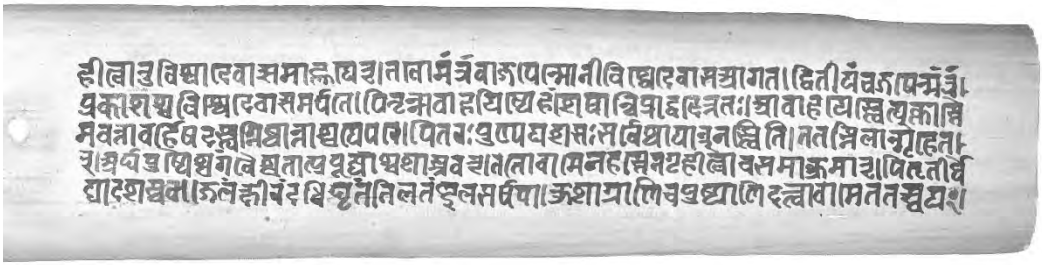
left



middle

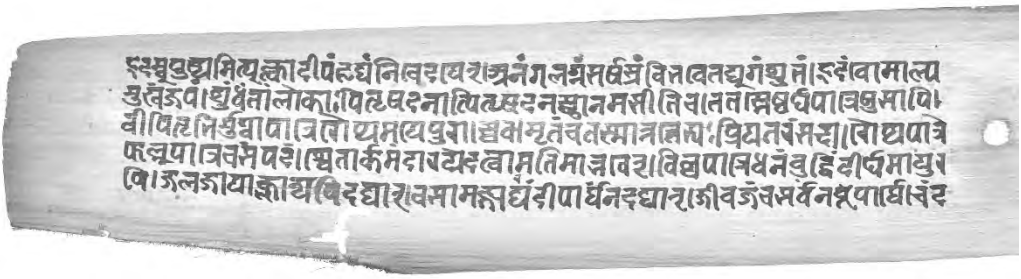


right

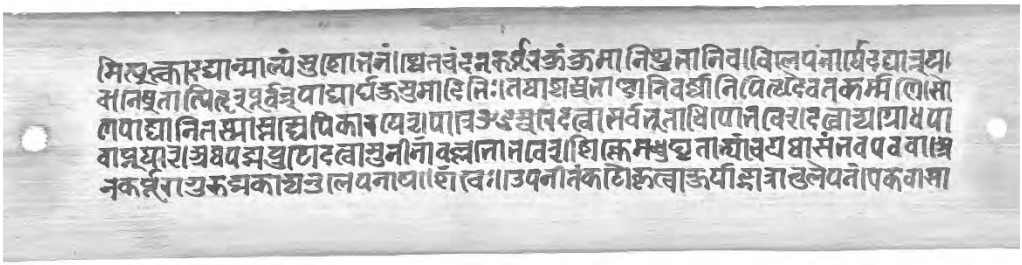


Folio 24 recto

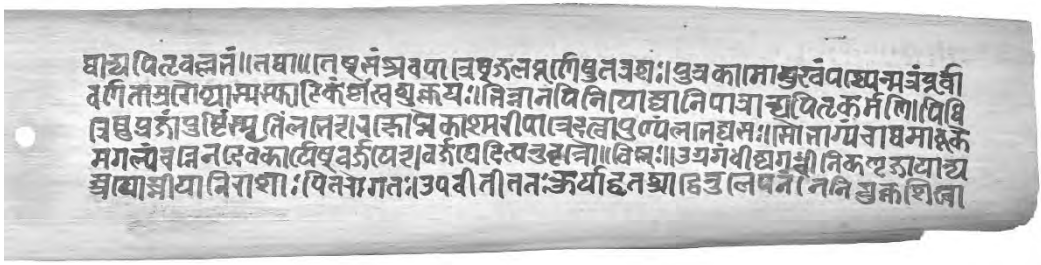
left



middle

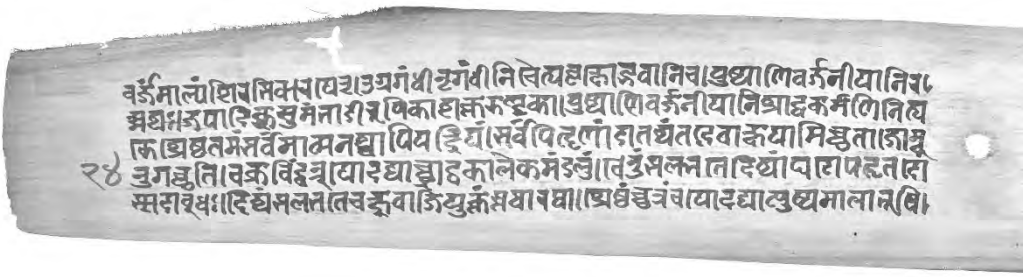


right



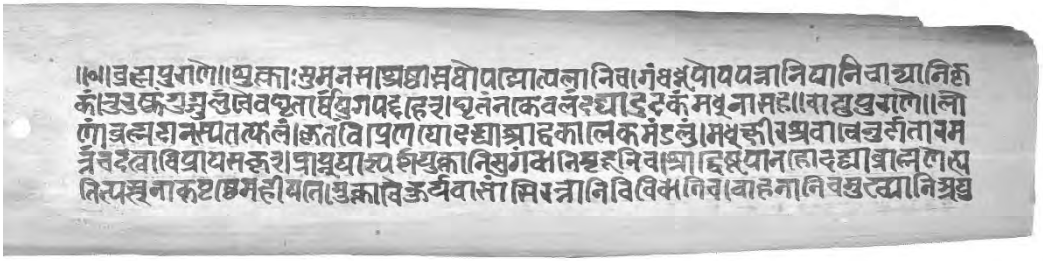
Folio 24 verso

left



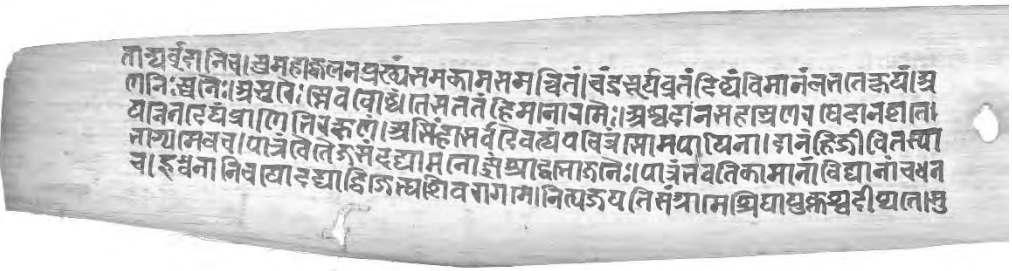
middle

right

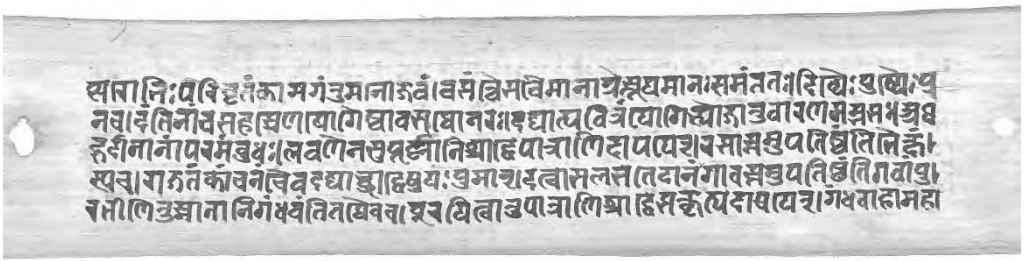


Folio 25 recto

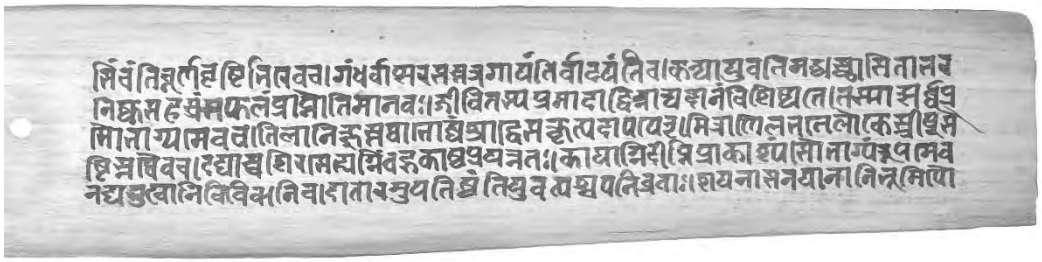
left



middle

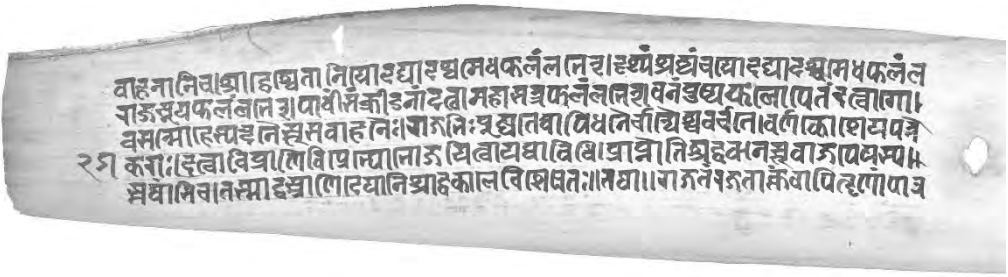


right

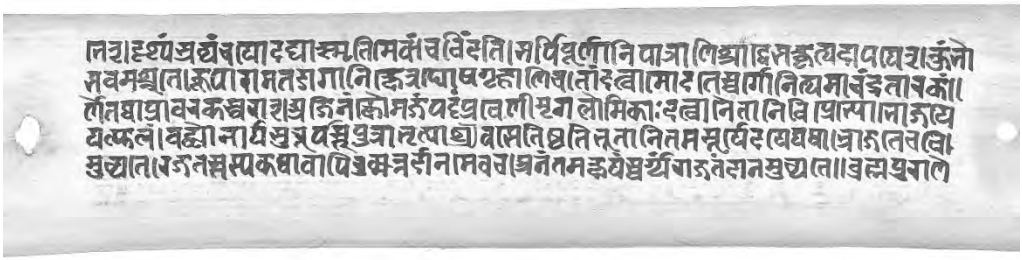


Folio 25 verso

left



middle



right